

現代語訛邊土紀行抄

長串望

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

遠い異世界では、どのような本が書かれ、読まれているのだろうか。

これは私たちの知らない世界で書かれた古い古い紀行文を、現代語に訳したものとい
う体裁の、ファンタジー文学テキストです。何を言つてゐるかわからぬと思ひますが私
もわかりません。

タイトルでオツと思つた人だけお読みください。多分他の人には刺さりません。

この作品はPixivに掲載していたものです。

小説家になろう、ハーメルン、カクヨム、ノベルアップ、アルファポリス、ノベリズ
ムに同時に掲載しています。

目

次

はじめに

二二年 サンザールの月 二十一日 縞

二二年 サンザールの月 二十三日 鑄

二二年 サンザールの月 二十九日 澄

二二年 サンザールの月 十一日 縞

二二年 エトウンの月 十三日 鑄

二二年 エトウンの月 十四日 灰

二二年 エトウンの月 十四日 輝

二二年 エトウンの月 十四日 曜

二二年 クマランの月 五日 輝

二二年 クマランの月 五日 曜

二二年 ゼン▣ゼンの月 十六日 斑

二二年 ゼン▣ゼンの月 十六日 曜

81

二二年 ゴランの月 二十三日 縞

二二年 ゴランの月 二十三日 曜

二二年 ゴランの月 二十九日 澄

二二年 ゴランの月 二十九日 曜

21

二二年 レムの月 二十三日 縞

二二年 レムの月 二十三日 曜

二二年 レムの月 二十七日 澄

二二年 レムの月 二十七日 曜

17

二二年 サンザールの月 二十一日 縞

二二年 サンザールの月 二十一日 曜

二二年 サンザールの月 二十一日 澄

二二年 サンザールの月 二十一日 曜

69

63

二二年 バンセの月 十一日 縞

二二年 バンセの月 十一日 曜

二二年 バンセの月 十一日 澄

二二年 バンセの月 十一日 曜

7

二二年 ゼン▣ゼンの月 十九日 縞

二二年 ゼン▣ゼンの月 十九日 曜

二二年 ゼン▣ゼンの月 十九日 澄

二二年 ゼン▣ゼンの月 十九日 曜

55

1

二二年 ゼン▣ゼンの月 十八日 濁

二二年 ゼン▣ゼンの月 十八日 曜

二二年 ゼン▣ゼンの月 十八日 濁

二二年 ゼン▣ゼンの月 十八日 曜

47

40

28

二二年 サンザールの月 二十一日 曜

二二年 サンザールの月 二十一日 曜

二二年 サンザールの月 二十一日 濁

二二年 サンザールの月 二十一日 曜

はじめに

献辞

道楽者の素人研究者に代わって生活費を稼ぎ、養ってくれた最愛の妻に捧ぐ。

はじめに

タイトルの堅苦しさを乗り越えてくださった読者の皆様の緊張をほぐすために、私的な話をさせていただこう。この本の初稿が仕上がり、真っ先に感謝と共に手渡した相手であるところの最愛の妻からは、こんなものを仰々しく捧げるくらいならとつとと次の本を出せとありがたくも厳しいお言葉を頂いた。もつともである。次に皆様のお目に

かかる時は、『現代語訳　邊土紀行全文』となると思う。その時はぜひ手に取っていただきたい。

さて、翻訳にあたつて、多くの幸運とご助力があつたことを、ここに感謝とともに述べておきたい。

私が酒の席でちらと溢あふしだだけの希望について適切なタイミングで思い出してくれた上、ゼンバーの古書市に長らく放置されていた『邊土紀行』のほぼほぼ全巻をその場で買い付けて完全な保存状態で私に郵送してくれたカラツカム助教授。当時の文化的、歴史的表現を理解するために必要ないくつかの重要な史料を積もりに積もった酒代の代わりに快く貸してくれたバンドウ教授。出版に当たつては、無知で愚鈍な著者の提案を一つ一つ噛み砕いて現実的な形で実現してくれたジャンカース出版のケンメル編集者。並びに私のモチベーション維持に大いに役立ってくれた愛犬モロモフ号には限りない感謝を。

大体このあたりで読者の半分は読むのをやめるか読み飛ばす心持ちになつてきたと思うので、大半の読者は読まなくとも問題のない、翻訳元である『邊土紀行』やその歴史的背景についてなどをざっくりご説明していきたい。空行のところまで読み飛ばしていただいて問題ない。

そもそも『邊土紀行』とは曙光歷十五世紀前半に記された紀行文である。当時まだ邊

土とひとくくりにされ「蛮族の住まう未開の土地」として扱われていた、今までいうアルメント地方以東を巡る旅の記録だ。ファル・アルメント国際空港をはじめとした近代的な施設や都会的な街並みをご存知の皆さんには意外かもしれないが、十五世紀頃のこの地方は飛び地的に部族単位の集落が散らばる程度で、一応はムン王国の領地として扱われてはいたが、実質はまつろわぬ民たちの領域だった。

『邊土紀行』は、アルメント邊土公ゼ・クラム・エルマ・ガン・ラ・ムン（当時はまだサンクラン子爵扱い）が、王国の領地としての開拓及び現地民との交渉の足掛かりとしてこの未開の土地を視察した記録文、ではない。記録文としての文章は、公文書としてまとめられたものが『アルメント地方視察報告書』としていまも原本が王国立図書館に収蔵されているほか、その写しも公開されている。

この『アルメント地方視察報告書』は邊土公が公人として明瞭簡潔、かついくらかの貴族的政治的修飾や配慮を施したガチガチの報告書である。一方で『邊土紀行』は邊土公自身ではなく、視察の旅に同行した従者サイネカリアが記した個人的な日記を、（おそらく小遣い稼ぎ目的で）出版社に持ち込んだものなのだ。

身分を隠して遍歴の騎士として行動していた邊土公の従者については公文書にも記されておらず、詳細な人物までは判明していないのだが、『邊土紀行』内から読み取れる限りにおいては、ハルモールの農村部出身の平民上がりで、裕福ではないものの読み書

きができる、旅の本当の目的（観察）も知らなかつたという、民俗研究者としては実にピントで好都合な人物なのである。

というのも、平民上がりであるから貴族的事情などには疎く、当時の一般的民衆の感覚に近い。アルメント地方から離れた王都寄り出身であるというのもありがたく、というのも現地の当たり前について流すことなく言及してくれていて助かるのだ。その上で読み書きが達者だということで『邊土紀行』が文書として残っているというのが最大の幸運である。

とはいって、この幸運に関する仕組まれたものである可能性もあるだろう。というのも、『邊土紀行』出版に関しては奇妙な点が多いのだ。

当時、平民上がりで騎士の従者となるものは多かつたが、彼らの多くは多少の読み書きができるか、普段使う単語を読める程度のものばかりで、詳細な文章を書けるものは限られていたこと。まして日記という形で毎日書き記すほど筆まめなものなどほとんどいなかつただろう。これは現地に詳しいアルメント地方出身者ではなく、わざわざ条件の合う人物をハルモールから採用したことも関わりそうだ。また運搬できる荷が限られている中で、邊土公自身の用いる上質な羊皮紙や筆記具に加えて、従者に過ぎないサイネカリア用に安価でかさばらないとはいえた紙と筆記具が常に補充されていたこと。また、これといった伝手を持たないサイネカリアが、当時膨大な印刷業務を抱えて

いたギレムリ社に渡りをつけ、安価なペイパーバックのかたちでスムーズに出版までもつていつたことも、邊土公の露骨な後押しがあつたようと思われる。

これらのことから、恐らくサイネカリアは最初から紀行文を書くために従者として選ばれたのではないかというのが私の考えである。つまり、アルメント地方以東の事柄を庶民の目線で記録させ、安価で出版して世間に知らしめることで、「蛮族」たちに対する印象を軟化、興味を引かせることを目的としたのではないだろうか。自身が統治することとなるだろう邊土と、王国との滑らかな融和のために。

もちろん、現地では今もまことしやかに語り継がれている邊土公の御稚兒趣味おちごに関する話題では私も承知の上だが、これもからかいという形で表出した邊土公に対する親しみの表現であろう。

詳細に関しては、本書の出版に先駆けて発表した論文をご覧いただきたい。
さて、ざっくり読み飛ばしていただいたところで、本書について。

本書は「抄」とあるように、『邊土紀行』の全文ではなく、一部分を抜き出して、現代語に翻訳して掲載している。時系列はおおむねそのままであるが、一部は読者の理解を助けるために順番が前後する部分もある。

また、翻訳に際しては、古めかしい言い回しや単語に関しては、読みやすさを重視して可能な限り現代語に置き換え、場合によつては訳注をはさむことで対処した。全体と

して、正確さよりも、読み物としての読みやすさ、娛樂性を優先したことを申し上げておく。

それから、『邊土紀行』においては、当時の庶民の目線から書かれたものであり、十五世紀当時は当然であつたものの、今日においては差別的な表現や、暴力的な描写、また誤った知識や、宗教的倫理的に配慮の欠ける文も多く見受けられる。

しかし当時の風俗、習慣、価値観を一方的にはしろにするよりは、その雰囲気や息づくものを感じ取つていただくべく、おおむねはそのままで掲載させていただいた。

また、かつて差別があつたこと、誤った認識があつたことを風化させず意識することで、現代まで続く根深いこれらの問題への理解を深める一助となればと願う。

退屈な話が続いたが、次のページからはすっかり氣を楽にして、純粹に娛樂として、当時の人々を楽しませた紀行文に没頭して頂きたい。

二二一年 サンザールの月 二十一日 縞曜日

アミエリタの娘、カリアラガンの子、ハルモールのサイネカリアが記す。

二二年 サンザールの月 二十一日 縞曜日

これからることはすべて日記に書いておくように言われたので、せつかくだから、村うちの村 ハルモールには現在でもひなびた農村が広がっているが、従者サイネカリアの出身地とされる村は判然としない。『邊土紀行』中の表記に合致する村は三つまで絞られているが、そのどれもが出身地を自称しているのだ。を出た時のことから書いておく。

騎士様の従者にするために頭の良い子供を探しているというお達しにのこのこ顔を出した結果、ほとんど流れ作業のように荷造りとお別れを済ませて、人さらいよろしく馬車に詰め込まれて家を出たのがほとんどひと月前。

あたしがいくらで売れたのかはよく知らないけど、あたしがお勤めの間に日々貰えるお給金については、それが嘘でなければ、村にいたつて一生稼げやしない金額だつた。

騎士様の従者騎士様の従者 サイネカリアはあまり理解していないが、ここでいう騎士とは勅任騎士、つまり王から任じられる騎士のことではなく、領主がそれぞれの私兵として任じた騎士のことである。この騎士の従者は平民からなることが多く、その従者が見習いを経て騎士となる。平民からすると出世街道だつたわけだ。勅任騎士の従者として抜擢されたサイネカリアはその出世街道を大きく飛び越えてしまつた形になる。つてのが、こんなに儲かるとは知らなかつた。みんななりたがるわけだ。出世とか、いつか騎士の身分にとか、そう言うのは興味がないけど、ご飯がたくさん食べられるのはいいことだ。

はじめておさがりではない服も着せてもらつたし、旅の間は食事も食べさせてもらつた。とはいっても、馬車で急ぐ旅だつたから、多くは野営で硬いパンと薄いスープ、たまに宿場町でちよつといいご飯つていう程度。ほとんど馬車に乗つてるだけとはいえ、強行軍でひた走る馬車つて言うのはずいぶん疲れるもので、あたしは腰が砕けて粉になれるかと思つた。

それも、ひと月もの間だ。

ひと月！ てつきり隣の領地くらいと思つていたら、あたしは飛ばしに飛ばした馬車

に振り回されて、ひと月もかけて邊土にやつてきたのだつた。道中何回も、あたしはどこに連れて行かれるんですか、お家に返してください、つて泣く度に、連れの騎士様は困つたようにあたしに飴玉を寄越して、それで毎回誤魔化されてしまつた。最後の方は飴玉貰うために泣いてた気がする。

邊土についてお別れした時も、本当は自分で食べようと思つてたんだぞつて思いつきり恨み言を言いながら、残り三分の一を切つた飴玉の瓶を寄越してくれたので、本当にいい人だと思う。

あたしが引き渡されたのは、ハルモールのご領主様の館よりも立派な大きなお屋敷お屋敷 現在もほほそのままで残つてゐるサンクラン砦である。当時邊土公はサンクラン子爵として一時この砦に起居していた。邊土公の位を叙せられ、アルメント城が建てられて以降は、生涯をそこで過ごした。で、石造りのそれはむしろ城つて言つた方がいいのかもしれない。あ、砦かな。

あたしがお仕えするという騎士様は、その砦に住んでいらして、ハルモールで見かけた騎士様より多分ずつとえらい騎士様なんだと思う。騎士様のお名前はゼ~~ク~~クー・エルマゼ~~ク~~クー・エルマ 騎士に扮した邊土公の変名。本名の愛称系ゼ~~ク~~クーと、母姓エルマから。親しい友人と書簡にも短縮形として用いることが多々あつた。とおつしやつた。

わざわざあたしをド田舎からド田舎に連れてくるなんてどんな方なんだろうって、馬車の中ですつと想えていたんだけど、騎士様はその予想のどれとも違った。

まず、女人の人だつた。女騎士女騎士 十五世紀当時のムン王国では、女性騎士の割合はわずかに一割程度だつたとされる。それも貴婦人の護衛などに従事する者が多く、戦力としては期待されていなかつた。という奴だつた。あたしでなくとも見上げてしまふほどすらつと背が高くて、燃えるような赤毛が、くしゃくしゃつと癖毛になつてた。騎士様はチビつちやいあたしに合わせるようにかがんで、あたしにいくつか尋ねた。ちゃんとご飯は食べてるかとか、得意なことはどか。それに旅は好きかつて。あたしは緊張して、はい、はい、と答えるばかりだつたけど、騎士様は満足したようだつた。

その日はメジロワシのローストや、新鮮な生野菜、混ぜ物のない白くて柔らかいパンなど、飛び切り美味しいご馳走を頂いて、恐ろしく柔らかいベッドで休ませてもらつた。これからしばらくはこういうのがないから楽しんで、と言われて、逆にこの先が不安で楽しめなかつた。

翌日の朝早く、騎士様からいくつかの贈り物があつた。ひとつは丈夫な靴で、村を出た時からずつとはだしだつたあたしの足に、大きさを確かめるように履かせてくれた。靴なんて滅多に履かないから落ち着かないけど、邊土は足元が危ういこともあるからということだつた。

次にはたくさんの荷物が詰まつた背負い鞄だつた。保存食や、衣類や、細々とした道具、それになぜだかたっぷりの筆記用具が詰まつていた。あたしがこれを背負つて運ばなきやいけないらしい。せめて紙は置いていきましょうよと言つたけど、あたしがちゃんと従者をできているか、日記に書いておくようについておっしゃる。書くのは好きだけど、荷物が多いのは困る。

そして三つめは、馬だつた。鞍も荷もすっかり準備されて、旅立つ時を待つ馬だつた。尾羽がふわりと広がる健康そうな立派な馬で、くちばしを撫でてやると、人懐っこくすり寄つてきて、可愛い。小さいあたしがよじ登れるように、屈んで首を下げる賢い子だ。

そう、従者のあたしも馬に乗つていいんだつて！ そりや、走るのは苦じやないけど、でも荷物を背負つてついてくのは大変だつて思つてたから、一番うれしい贈り物かもしれない。荷物が多いからついでにって言うけど、それでもうれしい。

騎士様は旅装に身を包み、腰に剣を佩いて、馬にまたがつてとても格好良い。その後ろにくつつくあたしは、どう見ても荷物にうずまつて、馬の背中にしがみついてるみつともないチビだけど、そのうち何とか見れるようにはなるんだろうか。

あたしは騎士様の旅について、そのお世話をすることになる。旅というのは、ここから東の方、邊土を巡つて土地柄や人々のことを調べて、領主様にお伝えするための旅旅

領主であるサンクラン子爵が、その配下である騎士ゼ~~ク~~クーに命じた、という建前に
よる視察であり、領主本人が自身に旅を命じて自身で旅をするという妙なことになつて
いる。第二王女であつた邊土公は十分継承権争いの範囲内で、当時第二王子派と第一王
女派から疎まれ、邊土視察及び開発という功をもつて地位を確かにしようとしていた。
また旅自体も、両派からの刺客を警戒してとの説もある。

だそうだ。

この日記は、最初にして最後の宿場町で書いている。この先はもう、王国の力が及ば

ない土地なんだそうだ。

明日からは、いよいよ邊土に挑むことになる。

あたしの旅は、ここから始まるのだ。

二二一年 サンザールの月 二十三日 錆曜日

二二年 サンザールの月 二十三日 錆曜日

早速帰りたくなってきた。

馬に乗り慣れない私を気遣つて、騎士様は度々私を膝にのせてくれる。見慣れないものなどを一つ一つ説明してくれる。心細くなっているだろうとよく触れて、撫でてくれる。

その気遣いは大変うれしい限りなのだけど、いくらチビでも私も数えで十五数えで十五十五世紀当時、子供という概念はいまと比べると、「小さい大人」という程度。相応に働けるようになる十四、五歳程度で成人とみなされ、婚姻・出産することもざらだった。になる。さすがに恥ずかしい。

まあその恥ずかしさは、お気遣いをないがしろにもできないから仕方ないんだけど、問題はご飯だ。

騎士様が意外にも料理ができるっていう話を昨日書いたけど、レパートリーが少なす

ぎる。

昨日も言つたけど、保存食として持つてきた、干し肉と、干し野菜と、ビスケット。これを鍋で煮て、なんていうか、とりあえず腹は膨れるつていうのを繰り返して。昨日だけかなつて思つたけど、今日も朝昼と続けてこれだつた。

飽きないんですかつて聞いてみたら、遠征訓練遠征訓練 邊土公は伊達や醉狂で騎士に扮したわけではなく、実際に騎士として訓練に参加し、兵卒に混じつて遠征訓練などを繰り返していた記録が残つて。ではいつもこれだつたからつておつしやる。騎士様も、大変だ。でもあたしは飽きるので、あたしも作つていいですかかつて言ひだすことにした。そもそもは従者のあたしがしなきやいけないので、ちつちやいからつてさせてくれなかつたのだ。

あたしはもう十五歳で、村では自分のことくらいできましたからつて何度も言つて、ようやく頷いてもらえた。

早めに野営の準備を整え、近くの川で水をくむついでに、適当な貝を捕まえた。運がいいことに、地元ではなかなか見ない大振りなサザエサザエ 実際にはアルメンツ地方に多く見られるヒゲリングガイであろう。ハルモールなど内陸地では、よく似た外見のタニシなどの巻貝の類を大雜把にサザエと呼んでご馳走として扱つてのことから、サイネカリアもそれに倣つたのであろう。寄生虫の危険があるので、要加熱。に、寝入る

ところだつたルリシジミルリシジミ 今日では河川の水質汚染や護岸工事の影響により天然の飛行性二枚貝はほとんど見られなくなつてゐるが、十五世紀当時は極めて安価で豊富に手に入る庶民的な食材だつた。

を見つけられ、鍋一杯になつた。おかげで水汲みはもうひと往復した。

ルリシジミが逃げないようにふたに重しをして、弱火でじっくり煮てやり、ふたを叩くかちかちいう音がすっかりなくなつたら、火から離して余熱で炊いてやる。一度貝を取り出してやり、干し野菜と干し肉を加えて、塩気と具材を補う。

とろ火で炊きながら、貝殻から身をほじくり出す。面倒だけど、たまに外れもあるのでそれを弾けるし、食べるときに面倒がない方が楽でいい。騎士様も手伝つてくれたけど、慣れないのか、たまに貝殻を握りつぶしてしまつ。本人は恥ずかしそうにしていたけど、その握力はちょっと怖い。

ほじくり出した身を鍋に戻して、酒を加えてひと煮立ちさせ、出来上がり。

炊いただけの雑な料理だけど、材料がいいから、なかなか美味しく仕上がつた。貝は煮るとよくよく出汁が出るから、塩気は少なくとも、食べた気になる。酒を加えると泥臭さも消え、香りも立つ。炊きすぎると硬くなるけど、うまく柔らかく炊いてやると、くにゆくにゆと楽しい。

騎士様も喜んでくれ、ずいぶん褒められてしまつた。

物珍しそうに食べるので、貝は普段お食べにならないのか尋ねてみたら、殻に包まれてるのは知らなかつたつておっしゃる。むき身でしか見たことがないんだつて。いいとこのお育ちなのだ。

食べた後のルリシジミの貝殻を大層珍しがつて、首飾りにしようなどというので、慌てて止めた。そんなのは農村の子供くらいしかやらない、おもちゃみたいなものだ。騎士様がつけていたら、笑われる。

この先もこの調子なのかと思うと、なんだかあたしが頑張らなきやと妙な責任感がわいてきた。

殻は、本当に残念そだつたので、仕方なく洗つて穴を開け、ひもでつないで差し上げた。

二二一年 エトウンの月 十三日 錆曜日

二二年 エトウンの月 十三日 錆曜日

邊土の旅が一筋縄ではいかないということは、旅立つ前から散々言われ、この日記でも随分ぼやいてきたけれど、今日という日はその最もたる一日だと思う。明日もこの調子だつたら、いよいよあたしはお給金を返上しても旅をやめて国に帰らせてもらおうと思う。

なんて、このフレーズも使い古してしまつたけど、今度こそは本当にそう思う。

少し前までは、野山をやんちゃに駆け回つてきたあたしが、きれいなお顔の騎士様に後れを取るのがなんだかしやくだつたけど、近ごろは後れを取つた方が普通な気もしてきた。お人形さんみたいな顔をしておきながら、騎士様ときたら平気な顔でカエルもかじるし泥の中も歩くし、独りでも何にも問題ない気がするから。

今日も朝から、あたしたちはサンゼン川を付かず離れず遡るように、森をさ迷い歩いた。うつそうと茂った森は昨日も一昨日もその前も変わり映えがしないどころか深く

なる一方で、うんざりしてくる。馬たちも憂鬱ぎみで、尾羽がしなびた青菜のようだ。騎士様はしつとした顔で、まだ春でよかつた、夏になればいよいよ緑は濃く深くなつて、いま歩いている道もすっかり覆われてしまつただろうねなんて仰る。

道！

これが！

もはや獸道ですらない、なんとなく下生えが薄いかなというところを、立ち泳ぎでもするように浮き沈みする馬たちの上で揺られて、ため息も出ようというものだ。荷物も多いしついでにと、従者のあたしまで馬に乗せてくれていなかつたら、今頃あたしは草に埋もれて溺死していたに違ひない。

草原を走るものの草原を走るもの

全文中に渡つて何度か言及されるが、その度にハーフ

であつたりクオーターであつたり、あるいは先祖がそうであつたりとはつきりしない。ハルモール地方にはグラスランナーが古くから住んでおり、混血度合いもまちまちなため、本人もよくわかつていなと思われる。少なくとも純血ではなさそうである。なんて言うけれど、いくら健脚だからつて、チビのあたしがこんな森の中を歩かされたらたまつたもんじやないだろう。

朝から何度か休憩をはさみつつも、景色は変わらず、気分も盛り上がりはず、昼になつて一度河原まで降りて、魚を捕つて焼いて食べる。この辺りは人が来ないからか、人慣

れしていなくてつかみ取りでもすぐに捕まえられる。ただ、あまり美味しくはない。

大体捕まるのは、なんとかいう蛇みたいに細長いによろによろした魚によろによろした魚 コグチウナギと思われる。当時から王都などではよく食べられていたが、ハルモールには棲息しておらず、食用されていなかつた。今日のサンゼン川では絶滅が確認されているが、十八世紀頃の詩句に「水の代わりにウナギが流れる川」などと歌われている。で、川面に背中が見えるほど気持ち悪いくらいうじやうじやいる。ぬるぬるするし、元気が良いので、掴むというより弾くようにして川辺に放り投げるのが一番楽だ。でも美味しくない。

手間のかかる料理をする気力もなくて、串焼きにして食べたけど、小骨は多いし、臭いし、身はぼそぼそしてるし、皮はぐにぐにとかたいし、脂もくどい。でも精はつくとのことで、無理矢理詰め込む。

これなら蛇の方がおいしい。旅立つ前のあたしなら、蛇を食べるなんて、と思つたかもしれないけど、蛇は美味しい。蛇食べたい。でも騎士様は、このあたりの蛇はあたしを飲み込めるくらい大きくて危ないから駄目だよつていう。バカバカしい。そんな大きな蛇がいるものか。アタシがチビつちやいからといつて子ども扱いするのはやめてほしい。『いた!!!』『いた!!!』後から書き加えられたもの。後日キハダオオウワバミに遭遇するエピソードが語られており、そのときに追記したものと思われ

る。

結局この日はぎりぎりまで歩いて、枝ぶりのいい樹上に即席の寝床を作つて寝た。そろそろ獣避けの練り香獣避けの練り香 コバナハツカをはじめとした獣や虫の忌避する香草類を刻み、磨り潰し、樹脂や粉炭と練り合せたものだとされる。が心もとない。最悪。明日言おう。もうやめますつて言おう。三食蛇みたいな魚は、もう嫌だ。

二二一年 エトウンの月 十四日 灰曜日

二二年 エトウンの月 十四日 灰曜日

やめるのやめた。

やはり旅はいいものね。

この日も朝から蛇みたいな魚を焼いて食べ、うんざりする道を歩き始めた。昨日と違うのは、その果てしない旅が、昼前に急に終わつたことだ。

あれだけうつそうと茂つていた森は、急に開けはじめて、下生えもほとんど突然なくなつて、馬たちも驚いているのが背の上からわかつた。そうして森を抜けると、心地よい風が吹いて、あれだけ蒸し暑く感じていたのに、ちよつと涼しいくらいの爽やかさだ。森が開けたわけはすぐに分かつた。自然に森が途切れたんじやなくて、そこからは、というか、そこまでは、森が切り拓かれていたのだった。まばらな木立を駆け抜けると、ぐるりを丸太を地面に打ち込んだような壁でかこつた村が現れたのだ。

あたしは思わず村だ！と見たまんまのことを叫んでしまつたけど、仕方ないと思う。

人里に出たのは、これで、何日振りだつて。一週間くらいは森の中だつたはずだ。

あたしたちはゆつくり壁に近づいて、それに沿うようにちょっと歩いた。門はこつちを向いてなかつたのだ。ようやく門にたどり着くと、やぐらみたいな見張り台から、ガラガラ声が降つてきて、見上げたあたしは腰を抜かすかと思つた。

騎士様が名乗つたけど、反応は芳しくなかつた。そりやそうだ。すっかり慣れちゃつた。邊土じやあ、王国の地位とかお役目なんてのは、まったく意味のないものだ。でもあたしたちが旅人で、色々見て回つては通じたみたいで、それから、こらじや珍しいものも持つてるかもしねないって言うのは響いたみたいだつた。

ちよつと待たされて、分厚く重たげな扉がゆつくり開かれて、あたしたちは村に入れてもらつた。

それにして驚いたのは、この大きな扉を開けるのが人力で、それも見張り台から降りてきた若者ひとりの力だつたことだ。さすがはオーガオーガ　今までいう有角人。東アルメントの有角人は、人種的に大陸の有角人とはかなり早い段階で分岐しており、姿は似ているが殆ど血統につながりはない。体格も大陸有角人より大柄になりやすく、角の形成は全く違う。だ。その若者は、あとからわかつたけど村の中では小柄な方なのに、それでもつぽの騎士様よりまだ大きかつた。馬に乗つた騎士様と同じくらいだから、あたしからすればまさしく見上げるほどだ。シンプルに、怖い。

「平原猿平原猿 全文を通してよく見られる表記で、人族のこと。でねえか。なしてこ
げなどこまで来た？」

若者が呼んだらしい、いくらか年嵩のオーガがあたしたちを出迎えた。言葉はぶつき
らぼうだけど、顔つきは全く素直で、驚きのままに言葉が出てきたようだつた。騎士様
は馬から降りて挨拶しようとしたけど、オーガはやめるように言つた。屈んで話したく
ない、平原猿に合わせたら腰が折れる、という。あたしは憤慨したけど、騎士様が笑つ
て、私も首が折れるのは嫌だと言うので、オーガは口を大きくあけて笑つた。顔の半分
は口なんじやないだろうかというくらい大きい。人食い鬼人食い鬼 現在も差別用語
として用いられることがあるが、大陸種もアルメント種も、亜人種を主要な食用とした
ことはない。特にアルメント種は内臓構造及び腸内関係からも明確に草食寄りで、狩猟
によつて得た獣肉も消化しやすいようかなりの加工が施される。そもそも狩猟自体も
害獣駆除や毛皮や角などの資源目的が強い。といわれるだけはある。あたしなんか
きつと丸呑みだ。

もう一度名乗つて、用向きを伝えると、年嵩のオーガはじろじろとあたしたちを見た
後、良いとも悪いともいわず、ただ顎でしゃくつて踵を返してしまつた。若者は見張り
台に戻つた。どうしようと思つてゐる間に、騎士様が後に続くから、あたしもあわてて
ついていつた。

オーガの村は、なにもかもが大きくて、縮尺が違っていた。全部がオーガの体に合わせてあるから、あたしはなんだか小人になつた気分だ。実際ちつちやいんだけど。建物の様式は、ハルモールでも、今までの旅でも見かけたことがないものだつた。ほとんどが、丸太を地面に突き刺して並べて壁にして、屋根は、獣の革を何枚も縫いでつなげたものや、大ぶりな布を、テントのようにその上からかぶせて、ロープと杭で地面に固定しているのだつた。

歩いているうちに、物珍し気に見物に出てくるオーガが増えてきた。みんな酔っぱらつたような赤ら顔で、子供でさえ、あたしより大きいかもしねなかつた。あたしは美味しくないから食べるのは騎士様だけにしてほしい。

辿り着いたのは村のまんなかの家で、他より少し大きいし、立派だつた。毛皮のたれ布を除けて中に入ると、なかなか広々としている。床材は張つていなくて、平らにならした地面の上に、毛皮や布を敷き詰めているようだつた。家のまんなかには、炉が掘られていて、大きな鍋が火にかけられていた。

炉をはさんで向こう側に、今まで見たオーガの誰よりも大きなオーガがどつかり座つてた。ほんと、岩に手足がついたようだ。額から突き出した角額から突き出した角 大陸有角人が牛のような角を持ち、一生伸び続けるのと異なり、アルメント有角人の角は鹿の仲間のものに近く、枝分かれし、一年ごとに生え変わる。枝分かれ

の多さや角の大きさ、左右のバランスなどで評価され、立派な角を持つ個体が優秀であるとされる。も、凶悪そうにねじれて、枝分かれして、あれで頭突きされたらあたしはズタズタにされそうだつた。

勧められて腰を下ろし、三度目の名乗りと用向きを告げると、大オーガは、自分は村長で、お前たちを歓迎する、余所者が来ることは滅多にないので、村の者たちも面白がつて見に来るだろう、悪気はないから適当に相手してくれと、訛りの強いザンカ語っぽい交じり言葉訛りの強いザンカ語っぽい交じり言葉 アルメント地方以東では現在でも古ザンカ語の語句が多く残つており、ムン王国以前に古ザンカ系民族との交流があつたことが示唆されている。東に行くほど語形の変化が少なく、古ザンカ系民族が東へ東へと移動していくたという仮説を補強するものもある。で言つた。

それで、あたしたちを連れてきた年嵩オーガが、村長オーガの傍に行くように言うのでのこのこと行つてみると、村長はおもむろに騎士様に頭突きした。あたしは変な悲鳴を上げそうになつたけど、その前にあたしも頭突きされた。頭突きというか、正確には角をそつと当てられたという感じで、それがオーガの親密さを示す挨拶だというのは後から知つた。

騎士様に言われて、村の広場で交易用の品を広げた。多くは、一つ前に立ち寄つた村で仕入れた干物だつたけど、やはり受けた。村の生活つていうのは結構食べるものが限

定されるから、他所からの食べ物は喜ばれるのだ。あたしはそろそろ実家のご飯が恋しいけど。

カエルの干物がぼちぼち売り切れた。前の村ではギリギリ王国通貨が通じたけど、この村ではお金つていうもの、そのものがなかつた。支払いは村で余つたものや、食べ物を頂戴した。この先もこうなるだろう。そうなるといよいよもつて財布は重しにしかならないので、どうにかしたい。

昼は、例の蛇魚をご馳走になつた。またかよつてげんなりしたけど、食べてみるとまるで別ものだつた。あたしが今まで食べてきたあのクツソ不味いゴミは、料理の仕方が悪かつたんだ。蛇魚を以前も食べたことがあるという騎士様も手放しで褒めていたので、王都でもこの味は食べられないんだろう。帰つたら広めてみてもいいかも知れない。

やることは簡単で、板に釘で打ち付けた蛇魚を背中から開いて串に刺してやつて、この魚を発酵させたちよつと匂う塩辛い汁魚を発酵させたちよつと匂う塩辛い汁 現在は失伝している集落も多いが、川魚を用いた魚醤の記述はサンゼン川流域で広く見られる。用いられる塩は、ク▣ク塩原から塩商人たちによつてもたらされていたとされる。と蜂蜜を混ぜたれを何度も塗りながら、火であぶるようにして焼くのだつた。普通の火で焼くより、炭火で焼いた方がぐつと美味しいけど、炭焼きをしている隣村の人も、

やつぱりたまにしか来ないので普段はやらないうらしい。

甘辛いたれをたっぷり塗り付け、ちょっと焦がすようにして焼いていくと、ぼたぼたと余分な脂が落ちて、その香ばしい香りだけが残つていく。で、焼きあがつたら、彼らが雷の実雷の実 現地ではこの名で呼ばれる香辛料が複数あり、この集落で用いていたものがどれかは不明である。『アルメント地方視察報告書』には「キイロナガザンショウ」と思われる野生の香辛料」（P. 56）を振舞われたとあるが、同種は現地に原生していない。と呼ぶサンショウっぽい実を粉にしたものを作り少しあけて食べる。

もうこれだけで、あたしは森の中をさまよつた疲れが吹き飛ぶようだつた。あれだけぼそぼそとしていて、変に脂っこかつたのに、こうして焼くと身はジューシーで、余分な脂の抜けた皮はさくさくとしている。ちょっと濃いくらいの甘辛いたれは疲れた体に嬉しいし、雷の実はぴりりと鼻に抜ける爽やかな辛みで、舌を飽きさせない。こんなに美味しくて、そのうえ精がつくなんて、食べられるために生まれたような魚だ。

一方で、夕食に出されたスープはがつかりだつた。

山菜とキノコを煮て発酵魚汁で味付けしたので、美味しいは美味しいのだけど、とにかく葉っぱ食わされてるなつて思うほど、ごつとり葉っぱを食わされるのだ。人食い鬼ならなんかこう、肉食べろよ。

二二年 クマランの月 五日 輝曜日

二二年 クマランの月 五日 輝曜日

蛮族ウーツ！

ちよつとインパクトが強すぎたのでこれ以外の書き出しが思いつかなかつたけど、こ
らえきれなかつた。というのも、バンブーエルフバンブーエルフ 竹林エルフとも。エ
ルフ亜種の一つで、大陸に端を発する、竹林に適応したエルフ種。繁殖力の乏しいエル
フ種の中でも、住環境の極端な限定と、隣接地域との軋轢などがあり、個体数は現在で
もほとんど横這いか下降気味で、ご存じない方も多いだろう。が出たのだ。実際、出たと
しか言えない。遭遇したとか、出くわしたとか、そういうの。

バンブーエルフの里は、竹林の中にあつて、といふか竹林がすべてバンブーエルフの
里だ。竹林は他の植物を押しのけて、それだけで出来てゐるから、それとすぐにわかる。
川を境にしてワサツと茂つた竹林を前にあたしは引き返すべきだつて思つたけど、騎
士様はそのバンブーエルフに用があるのだから、仕方がない。

出来ればバンブーエルフの里じやない、自然の竹林であることを祈つたけど、残念ながら入つてすぐに、バンブーエルフの縄張りを示すトーテムトーテム 宗教的掲示物の類の俗称として使用している。バンブーエルフはこの処刑法を好んで用いており、外周をぐるりと囮むようにトーテムが続いている竹林も存在したという。それぞれの竹は十年から二十年程度の寿命であるため、トーテムが存在するということは、近い過去に供給があつたということでもある。に出くわした。

それは一見普通の竹に見えるけれど、その根元には靴が一揃い落ちている。そしてうつかり見上げると、そこには靴の持ち主の衣服や荷物一揃いと、そしてそれらの持ち主の骨が一揃い、竹に突き刺さつて風にさらされていた。

恐ろしいことにこれは死体を竹に突き刺したものではなく、生きているうちに突き刺したのでもないらしい。あとでバンブーエルフがにこやかに教えてくれたところによれば、生きたままタケノコの上に「座らせて」拘束し、竹が伸びていくにしたがつてゆっくりと尻から串刺しにされるそうだ。拷問と、処刑と、見せしめとを全自動でやってくれるという。

オツ蛮族ウ、と心底ビビつた。

エルフというのは大概はた迷惑な種族だけど、バンブーエルフは蛮族通り越して、ハルモールあたりじや害獸扱いしているくらいだ。

というのも連中が棲み処にしているこの竹林というのが問題で、特にエルフが好む魔竹魔竹 魔力の豊富な竹類を特にそう呼ぶ。魔技巧品の素材としても優秀だが、管理が難しく、ほぼバンブーエルフ産となり、希少。は手に負えない。

竹は成長が速くて、タケノコという芽が出て一日もあればあたしの背丈は越すし、ひと月ふた月もあれば見上げるほどの成竹になる。そして伸びるのが速いだけでなく、はびこるものも早い。地面の下で根っこがみんなつながっていて、それがあっちこっちに広がつてはよきによき増えていくのだ。そうして広がると他の木々や草を追い払ってしまつて、竹しかない竹林になる。動物たちも、まだ柔らかいタケノコくらいしか食べられないでの、棲み付けない。

そんな生き物の棲めない魔の森を広げるのがバンブーエルフなのだ。

いくらでも生えるんだから何かに使えないかなつて思つても、竹つて言うのは纖維がとても強くて、うまくやらないと切るのも難しいらしい。人間の骨くらい硬いとか。そしてそんなに硬いけど、中は中空で、木材みたいに詰まつてないから、使い道が難しい。

でもバンブーエルフは、この竹を道具にするし、そして竹を食べる竹を食べる誤解されがちだが、バンブーエルフは夏場は主にタケノコや竹の葉を食べており、竹そのものは冬場に食べるものだという。素手で折つて、噛み砕いて食べる。つまり人間の骨くらい素手でへし折つて、噛み砕ける。

あたしたちが麦を育てるべく畑を広げるよう、バンブーエルフは竹林を広げる。時には竹の種をよそに持つて行つて殖やす。あたしたちが畑を開墾するよりもずっと早く、不毛の地に変えてしまう。悪魔か何かかな？

ハルモールでも昔、バンブーエルフがひそかに竹林を広げようとして、ひどい争いになつたことがあるそうだ。何しろ人間の骨を素手で握りつぶして、噛み砕けもするようなやつらだから攻めあぐねて、結局火をかけて焼いてしまつたそうだ。

昔話によくエルフの森が焼かれる話エルフの森が焼かれる話 実際の歴史上でも、エルフ種が隣接地域の種族と揉めて、紛争の結果として焼き討ちという形になることは少なくなかつた。というのも、多くのエルフ種が住環境に依存した生活を送つており、他所に逃げて立て直すということが難しかつたため、厄介なエルフを相手にするよりその周りを燃やすというのが手軽な戦法だつたのである。があるけど、大体はバンブーエルフの竹林を焼いた話が元だと思う。

そのような恐ろしい相手だから、おつかなびつくり馬を進めていたら、突然現れたバンブーエルフのパンダ・ライダーに遭遇するや悲鳴を上げてしまつたほどだ。あとで騎士様に窘められたけど、仕方ないと思う。

バンブーエルフは、エルフの仲間だけあって、美しい顔をしている。耳は「笹穂の如く」長くて、目は細っこくて、髪はきらきらと淡い金色だ。ただ、以前見た森エルフが

ほつそりとした顔立ちだつたのに比べて、少しがつしりとした顔立ちをしている。とい
うのも、顎がよく発達しているからだろう。

彼らが乗ってきたパンダパンダ 動物園の人気者。熊に似た生物。竹を主食とする
が、可能であれば竹以外も食べる。原産地の大陸ではバンブーエルフの迫害に伴い、そ
の保護下にあつたパンダも激減し、現在は絶滅危惧種となつてゐる。専門家によれば、
そもそもがなんで今まで生き残つてきたのか不明の生存困難種で、放つておいても絶
滅危惧種になつていたとのことである。というのは、大陸原産の生き物だそうで、バン
ブーエルフたちの畜獣だ。見た目はやや小柄ながら完全に熊で、でもなぜか色は白黒ま
だらという不思議な姿だ。絵に描いてみたけど、白いところと黒いところの割合が實際
どうだつたのか、描く度に怪しくなつた。

露骨に肉食の顔をしているけど、こいつらももっぱら竹ばかり食うそうで、生き方を
間違てる気がする。というか家畜と主食が競合してるのはどうなんだろう。生き方
間違ってる気がする。

突然現れたバンブーエルフに私は大いにビビリ、騎士様も少し慌てたようだつたけれ
ど、バンブーエルフが意外にも温厚だつた。あたしたちがやつてきたことは、竹林に
入つてきた時からわかつてゐたので、危ないものかどうかしばらく観察してから出てき
たのだそうだ。

いつたいどうやつて、と思つたけど、その答えは頭上から降ってきた。そこには、二本の竹に足指で器用に掴まり見下ろしてくる別のバンブーエルフがいた。これは地面から生えているように見えて、実際は伐られて加工された竹材で、竹馬竹馬 バンブーエルフの言う竹馬は、南諸島連合などにおける竹馬と似た概念だが、連合における竹馬が精々人の背丈程度の竹加工品であるところ、バンブーエルフのそれは成竹をほぼほぼそのまま使用したものである。というより、成竹を根元で切つて、二本の間で倒れないようバランスを取りながら登り、そのまま足代わりに移動するというもの。

こう説明するとバカバカしく思えるかもしれないが、この竹馬を利用した早期警戒戦術はエルフ戦争において高い効果を示しており、大隊規模の軍が竹林内に誘導され、包围殲滅された実績がある。というそうだ。彼らは子供の頃からこの竹馬に親しみ、竹林を駆けまわつて遊び、大人になれば、こうして巡回や斥候という役目をこなすのだとかも。もしかしたらちが怪しい奴だと思つたらどうしていたんだろう、というその答えは、実演してくれた。竹馬バンブーエルフはするすると降りて来るや、背中に背負つた弓を取り、矢をつがえ、ひょうと放つた。竹の乱立する竹林で、彼は百歩離れているだろう、それも細い竹に、見事に矢を中^あてて見せた。

弓の腕もさうだけど、弓自体も恐ろしい威力だ。あとで見せてもらつたけど、弓も矢も竹で出来ていた弓も矢も竹で出来ていた バンブーエルフの用いる弓矢は魔竹を加

工したものであり、竹林でも取り回しやすい小型でありますながら、遠距離から板金鎧を容易に貫通せしめる威力がある（実証済み）。竹林でいくらでも取れるとは言ふが、加工して扱うことができるものが、感覚で魔力を操れるエルフ種くらいのものであるため、当時も今も普及はしていない。

また、同じくエルフ亞種であるミントエルフを真似て、先端に竹の種を詰めた矢を敵地に射て、遠隔から竹林を増やすという戦法が取られたこともあります、現在は侵襲的生物兵器として国際法で厳しく制限されている。鏃も、金属でも石でもなく、竹を鋭く削つたものでしかなかった。矢羽根は、これは、竹の葉だろうか。信じられない。

それにしても動物が殆ど棲まない竹林で彼らは弓を何に使うんだろう。いや、わかっているけど。

パンダ・ライダーと竹馬ライダーに連れられて彼らの村に案内されたが、全く驚くべき村だった。

そりやそりやと言ふ外にないけど、建材はすべて竹。切つて乾燥させた竹をそのまま、または割つて都合の良い形に整えたものを組み合わせて小屋を作つてゐるのだった。真二つに割つて、節をくりぬき、交互に組み合わせたものを屋根や壁にすれば、水は通さず、しかし程よく空気は通す快適な家になるのだった。

しかしこれは、食べ物で家を作つてることになるんじやなかろうか。なんだか不思議

なので聞いてみたら、年嵩のバンブーエルフ（見た目じやわからないけど）に笑われてしまつた。よくわからないけど、バンブーエルフにはバンブーエルフ流の基準で、食べる竹と食べない竹がわかれているのかもしない食べる竹と食べない竹がわかっているのかもしない 分かれていない。彼らにとつてほとんどの建築物は固定のものではなく、多少古くなつてきたら食べて処分している。住居と食糧庫を同時に兼ねているわけだ。これは他の竹製品すべてにおいて言える。。

家の他にも、ありとあらゆるもの、例えば竹の形をそのままうまく利用した水筒や、かごなどの細々とした道具なども、すべてが竹由来だつた。腰に下げた鉈腰に下げた鉈今日、バンブープレードというと南方発祥のケン・ドーにおける竹製の稽古具を想像される方が多いだろうが、バンブーエルフにおいては実際に竹製の刃物がいまも利用されている。観光ついでにペーパーナイフと思つて土産に買うものも多いが、魔竹製のこれらの刃物は、精妙に魔力を通すことで金属製の盾を容易に切断した記録さえ残つてゐる。のように見えたものまで竹製で、驚いた。なお驚いたのは、普通の布に見えた衣服はどこと交易したのだろうかと聞いてみたら、これも竹の纖維で作つたという。作り方は秘密だそうだけど、よくもまあ。

一番驚いたのは、騎士様がそつと教えてくれたことで、あたしが頂戴してありがたく使つてゐるこの紙も、箋紙といつて竹の仲間から作られてゐるということだつた。わー

お。わーお、だ。

驚きはなお続いた。

というかもうこの日一日は驚きが止まることがなかつた。

せつかく来たんだし、飯でも食つていけよとお誘いを受けて、あたしはそりや無理だと思つたんだけど、騎士様が喜んでお受けしてしまつた。おいおい。どうすんの。いくらあたしの胃袋が頑丈だとは言え、竹は、無理。

と思つていたけど、それはバンブーエルフもわかつていたみたいだ。客人用の料理があるんだつて。正確には、竹料理の中でも、人族が食えるものを知つてゐる、つて感じだけど。

この時期はお前たちが食える料理が多いつていうから何かと思えば、タケノコ料理だつた。タケノコは食べられるつて言うのは、あたしも知つてゐる。あんまり味があるものでもないつて印象だけど。初夏の間はタケノコがポコポコ生えてきて、朝早い内から掘つてやらないとあつという間に伸びて竹になつてしまふから、この時期はノルマみたいにタケノコを掘つては、自分で食べたり、パンダの餌にしたり、交易としてお裾分けしたりするんだそうだ。

バンブーエルフって言えばとにかく竹林を広げようとする蛮族つてイメージだつたけど、彼らはむしろ広がらないように管理してゐみたいだつた管理してゐみたいだつた

現在、エルフ居住指定竹林として認められている十三の魔竹林は、すべてこのように「紳士的」なバンブー・エルフたちによって厳密に管理されており、そうでない竹林がどうなつたかは「エルフ戦争」をはじめとした史実でも有名。

タケノコ料理とやらはシンプルなものが多くて、例えば、本当に掘りたての新鮮で若いものは、薄く切つてそのまま生でも食べられた。みずみずしくて、穂先の部分はとても柔らかい。味は、少しあくがあるかなという感じもあるけど、ほとんど水。香りのいい水。竹の香りって、清々しいんだ。

岩塩をがりがり削つて少しかけてくれたけど、これはさすがに竹林では手に入らなくて、塩商人と交易しているらしい。

次にタケノコを湯がいてくれたけど、何と鍋も竹製鍋も竹製 要は、中の水が100°C以上にはならないために、水がなくならない限りは竹も100°C以下に保たれ、燃えないというわけである。他の文化圏においても、紙鍋や葉鍋などで同様の技法がある。だ。とても太い竹を、節のところで輪切りにして、二つに割つて、これを鍋だという。水を張つて、タケノコを切り分けたものを沈めて、塩を少し。これを火にかけるのだ。燃料は乾いた竹や笹で、竹炭なる炭も、炭焼き小屋で作っているらしい。

燃えちやうんじやないかと思つたけど、不思議と燃えない。燃えない竹を使つてゐるのかと思つたけど、これも燃えづらいだけで普通に火にかければ燃えちやうらしい。でも

水を張つておくと、燃えない。なんでだ。

湯がいてあく抜きしたタケノコは、あたしはこつちの方が好きだつた。太いところも食べられて、しつかりした歯応えが嬉しい。甘みも、感じられる気がする。でもまあ、どちらにしろ喜んで食うものか、という気はする。ある意味、お上品な味ではある。

騎士様は、お返しに我々の料理も見せようと言ひ出して、あたしは騎士様の言う通りに仕度した。バンブーエルフが水汲みに利用する川で、魚を何匹かつぶて獲りつぶて獲り 詳細不明。ハルモールなど、グラスランナーを由来とする地方に記録が見られるが、現在は技術としては失伝している。字義通りであれば、また文献中の描写などから見れば、石などを水中の魚に直接投げつけてぶつけ、捕獲していたとされる。

し、塩をして、さつきの竹鍋のように切つた青竹の中に寝かせる。そして片割れの竹で蓋をして、端を紐で結んで、火にかけるのだ。

さつきと違つて水を張つてないけど、青竹はもともと燃えづらいらしい。これをじつくりと、上下をひっくり返しながら焼いていく。表面真っ黒になつたけど、大丈夫だろうか、という頃合いで紐を切つて開いてみると、大丈夫だつた。内側は全くこげもなく、ただ川魚だけが良い具合に蒸し焼きにされていた。

早速食べてみると、これが格別だつた。ふつくらと蒸し焼きにされた魚と言うだけで

美味しいのに、そこに青竹に清々しい香りが移つて、単なる蒸し焼きを一段も二段も上の上等な料理に変えているのだ。底にたまつた蒸し汁も、味が染み出て美味しい。

なんてあたしは感動してたのだけど、バンブーエルフたちは大爆笑だつた。

「竹の香りって！」

「わざわざ竹の香りを移して魚食つてる！」

「竹食えないからな！ 平原猿竹食えないからな！ 可愛そうにな！」

「そうね。そうなるね。手間暇かけなくとも竹の香りなんて竹食えば済むバンブーエルフには関係なかつた。」

ただ、彼らも一緒に焼いた竹は気になつたようで、こげた部分をこそいでかじりつき、面白そうにしていた。あたしからすれば竹の香りがする魚という料理だけど、連中からすると魚の香りがする竹っていう珍味なわけだ。しかしそれにしてもバキバキと音を立てる彼らの食事風景は全く恐ろしい。

その晩お世話になつた竹製小屋の竹製ベッドと竹纖維毛布も、彼らからするとみんな美味しそうなんだろうか。不思議過ぎる。

二二一年 ゼン▣ゼンの月 十六日 斑曜日

二二一年 ゼン▣ゼンの月 十六日 斑曜日

邊土には本当に蛮族しかいない。

とはいっても、意外とそんなに蛮族でもないっていうか、ちょっと文化が違うだけで、割とよくしてもらっているので、蛮族つてなんだかわからなくなってきた。騎士様も、どういう付き合い方をすればいいのかを確かめるために旅をしているんだよとおっしゃる。あたしには難しいことはよくわからないけど、でも仲良くなるのはいいことだ。美味しいものが手に入るから。

サンゼン川を遡った先に、あたしたちは鱗あるもの鱗あるもの 鱗人種、リザードマンのこと。当時は魔獸と見るものも多かつた。たちが「母なる聖杯」と呼び、小鬼小鬼 矮人種のこと。当時は野蛮で未開の種族とされていた。どもが「ぬくい湿地」と呼ぶ湖湖 現在「シツカナル湖」の名で知られる湖。王国最大面積を誇る。原義は古ザンカ語の「シツク＝暖かな」「ナル＝広い」。にたどり着いた。

湖は驚くほど広く、向こう側が見えないほどで、いくつかの小島が見える外、水中から突然生えてきたような木々木々 カワヒルギを主要構成群とするマングローブ林。シツカナル湖のマングローブ群は国指定天然記念物であり、またマングローブ群を中心としたリザードマン集落は文化財に指定されている。の林もあった。それは湖の浅いところに根を張つてゐるみたいだつたけど、水上にまで根っこが張り出していて、なんだか怪物みたいだつた。

あたしたちははじめ、湖のほとりを沿うように馬を走らせてみたけど、まるで進んだ気がしなかつた。騎士様はまるで海みたいだとおっしゃつた。海つて言うのをあたしは見たことはなかつたけど、向こうが見えないこの湖よりなお広いというのだから、ぞつとしない。

この湖をぐるりと迂回するよりも、馬たちに頑張つて泳いでもらうか、もしくはどうにかいかだか何かを仕立てて、まつすぐ突つ切つてしまえないと、あたしたちは途方にくれた。

それを助けてくれたのが鱗あるものたちだつた。

二人してどうしようかとぼんやりしていると、水面にぷかりと浮いてくるものがあつた。そしてそれは少しずつ増えてきて、ぎょろつとした目であたしたちを見つめてきた。あんまり変な具合だから、それが顔だつていうことも、最初わからなかつた。彼ら

は水面からほどんど鼻先と目だけが出るような平らで長い顔をしていて、その顔の半分以上が牙もつ口なのだった。

その顔の一つが、思いの外に素早く岸に寄ってきて、しぶきをあげながら這い上がってきた時は悲鳴を上げるところだった。上げなかつたのは、驚きすぎたからだ。

黒っぽくつややかな鱗に覆われた体はたくましく、前のめり気味の体勢を、長い尻尾で後ろにバランスをとっているみたいだった。指先は思つたよりもあたしたちの手に近くて、短く太い指の先にある爪は、丸く切り揃えられていた。

屈み気味の体勢だけど、それでも騎士様と同じくらいはあつて、あたしなんかはひと呑みにされてしまいそうだ。

その、岸に上がつた一匹は、喉の奥から唸るような声で喋つた。

そう、喋つたのだ！

「大きなガヴァリンガヴァリン ゴブリン、矮人種のこと。古ザンカ語「ゴブリン＝矮人種」の転訛。鱗人種からすると哺乳類系の人種は区別がつかないことが多く、接する機会の多い種族名で呼ぶ例がよく見られる。と普通のガヴァリン水の低きを渡り損ねたか、哀れなガヴァリンを見かねて猛り尾の長きクドウシヴァル猛り尾の長きクドウシヴァル 鱗人種の中でもシユザ氏族系の人々は、一人称として自身の名前と、初対面の場合二つ名も重ねて用いる傾向がある。また全体的に第三者視点でものを言うことが

多い。

は浮き木を曳いてやろうと思つてゐる」

鱗あるものの声は唸る様で、抑揚のない一本調子で、そしてその喋り方ときたら独特のものだつたから、すぐには何と言つてゐるかわからなかつた。騎士様がいつもの鷹揚とした調子でやり取りをして、何とか分かつたのがこんな感じだつた。

この辺りには小鬼どもが棲んでいて、乾季になつて湖の水位が下がると、水上に顔を出す木々の根などを頼りに向こう岸まで渡つていくのだという。この「猛り尾の長きクドウシヴァル」は、あたしたちがそれに置いて行かれた可愛そうな子たちだと思って、向こう岸まで連れて行つてやろうかと言つてくれてゐるらしかつた。

まさしく渡りに船とあたしたちは喜んでお願ひしたけど、心配なのはこの大荷物と馬二頭。でもクドウシヴァルは笑つて——細く息を漏らすような唸り声が笑い声なら、多分——、「クドウシヴァルは大きな浮き木を持つ」と言つた。

この気のいい鱗あるものはざぶんと湖に飛び込んで、仲間たちと共に姿を消した。そして少しもしないうちに、あたしたちが馬と一緒に乗つても全く問題のない広さのいかだを曳いて戻ってきた。乗つても、いくらか揺れはするけど、実に安定していて、しつかり浮いてる。

これはガヴァリン、彼らの言う小鬼どもが作つたのだという。小鬼共は力は弱いけ

ど、手先が器用なので、色々便利なものを作ってくれるという。意外だ。

クドウシヴァルと何人かの鱗あるものたちが、繩で引いたり後ろから押したりして、いかだはぐんぐん進んだ。鱗あるものたちの泳ぎ方は、思つていたよりずっと静かだった。水の上に出すのは顔だけで、水しぶきも立てずするする泳ぐのだった。

騎士様はクドウシヴァルにお願いして、向こう岸に渡る前に、彼らの集落に案内してもらつた。あたしはてつきりいくつかある島のどれかだと思つていたんだけど、なんと湖によつきり生えた水上林が彼らの棲み処だつた。

木々はうねるような根を何本も広げて、絡み合い、その複雑な隙間に泥がたまり、小さな生き物たちが住み着き、魚なんかの餌になり、そしてそれを鱗あるものたちが食べるようだつた。

この林を囲うように、あたしたちの乗るいかだのようないくつもいくつも繩でつなげられて係留していた。そのうえには簡単な小屋も建てられていて、水上の村といつた感じだ。

あたしたちのいかだが接舷すると、村のあちこちでボケーツと口を開けてごろごろと横たわっていた横たわっていた寝ていたのではなくバスキング。鱗人種は体温調節の多くを日光に頼つており、日光浴によつて体温を上げ、また必要なビタミン類を合成している。これにより意外なほどに少食でも問題なく生きていく。鱗あるものたち

が、のそのそとむらがつてきた。余所者を見かけた田舎の村人と同じ反応と思えば可愛いものだけど、何しろ見た目が怖いので、反射的にお腹とお尻のあたりがきゅつとなる。でも、いかつい見た目に寄らず、彼らはとても親切だつた。というかおせつかいだつた。騎士様が一つ物を尋ねると、周りの鱗あるものたちがそれぞれ勝手に話し出すものだから、何倍にもなつて返ってきた。囮まれて喰るような声を浴びせかけられても平然として、きちんと聞き分けられているのは素直に尊敬してしまう。真似したくはないけど。

そしてあたしはあたしで囮まれて、小さい、瘦せてる、たくさん食べろとあれこれ押し付けられて参つた。もろにトカゲの親戚つていう見ためからゲテモノとか生の魚とかかななど思つてたんだけど、意外にも普通に食べられるものばかりだつた。

籠一杯持つてこられたキイチゴの類だとか、ちゃんと煮炊きした料理とかなのだ。驚いたことに、いかだの上に平たい石を敷いた炉が作つてあつて、そこで火を焚いて簡単な焼き物や煮物などをしているようだつた。

大きな魚を串焼きにしたものは、塩気には乏しいけど意外なほどよく肥えていて、何と養殖しているらしかつた。大きなザリガニのスープは出汁がよく出ていて、身も栗の実のような素朴な甘みがあつて、ぶりぶりとした歯ごたえが嬉しい。

それに泥に包んで蒸し焼きにした芋虫はところどころけるようだつた。

普通に食べてしまつて、自分が芋虫を食材として見れるようになつていたことが
シヨツクだつた。色々食べてきたもんなんあ。

騎士様は一晩をここで過ごして、明日向こう岸に渡してもらうとおっしゃつた。
果たしてこんな場所であたしは寝られるんだろうか。これを書いている今も不安だ。

二二一年 ゼン▣ゼンの月 十八日 潤曜日

二二年 ゼン▣ゼンの月 十八日 潤曜日

小鬼と灰鬼人灰鬼人 いわゆるウルコ、ウルク、オルフなどと呼ばれる夜行人種のこと。十八世紀以前までは多くの文化圏で邪惡な魔物として扱われていた歴史がある。矮人種とともに語られることが多く、今日でも秘密主義的で詳細は明らかではない。と言えば、大抵は女騎士と抱き合させで物語物語 ここで取り上げられているのは艶話の類のことと、気高く美しい女騎士が、醜い小鬼や灰鬼人に組み敷かれるというストーリーは一定の需要と供給があつたようだ。矮人種や夜行種が性に開放的であることや、繁殖力に富むことからの下卑た妄想だろう。実際のところ両種族の美的センスから言うと、人族は「ない」らしいのだが。に登場するものらしい。

つていうのは、村の男連中がひそひそと語り合つた話によるところなんだけど、まあ、言わんとするることはわかる。なりはチビでも、あたしもそういう下卑た話くらいは耳にしてきたし、男どものくだらない妄想も生暖かく見守つてやろう。

でもそれが自分の主に降りかかる災難となると、さすがにちょっと笑つては済ませられない。

もちろん、こうして日記を書いていることからも、あたしたちが無事で済んだことはわかるだろうけど、その時は本当に死ぬかと思つた。

心優しい鱗あるものたちの助けて湖を渡つたあたしたちは、サンゼン川——湖から上流はもう別の名前だつたつけ、鱗あるものたちがコン▣コン・メルコン▣コン・メル現在もコン▣コン・メル川の名で呼ばれる。語源は古ザンカ語「コンコマル＝流れ来る」か、「ココン＝遠く、メール＝湧く」あたりだろうか。と呼ぶ川——をさらにさかのぼり、小鬼どものあとを辿ろうとした。

あたしは小鬼どもなんか関わらない方がいいと思つたけど、騎士様が楽しみにしていたのでそもそも言えなかつた。騎士様は少々小さいものに目がなさすぎるようだ。小さかろうと、小鬼は小鬼だろうに。

小鬼どもは頻繁に湖と森とを往復しているようで、獸道程度の道はできていて、足跡も多く見つけられた。

足跡を隠しもしないなんて、やっぱり小鬼どもは賢くないんだなと思って、無警戒に馬を進めたあたしたちは呆気なく罠に引っかかつた。笑っちゃうくらい呆気なかつた。

そろそろ日が暮れそうだし野宿できそうな場所を探そうかつて言つてたら、突然道が

沈んでぽつかり口を開け、あたしたちは馬ごと落下した。そして同時に、そこに仕掛けられていた網があたしたちを包み込み、宙づりにしてしまった。どうやら落とし穴に引っかかった間抜けの体重を利用してもう一つの罠が連動し、ここからは見えないけど重石か何かで網を持ち上げ、獲物を宙づりにしてしまう仕組みらしかった。

そして罠に獲物がかかつたことを知らせるためなんだろう、網を吊るす繩にいくつも取り付けられた金属板がぶつかり合ってけたましく音を立てる。驚いた馬たちが網の中で暴れて、音は一層ひどくなつた。

少しして、小鬼どもがやつてきた。

身の丈はちびのあたしと同じかそれより小さいくらい。肌は浅黒く、目はぎょろついて、身体は土や泥で薄汚く、衣服の代わりにそちらの枝や葉を体に縛り付けていた。何匹かが周囲を確かめるようにしてあたしたちを囲んだけど、もしかしたら周囲の茂みにもつといたかもしない。

小鬼どもはみな変わった形の槍、あるいは弓のついていないクロスボウの先端にナイフを取り付けたようなものを持っていた。後から知つたけど、それは銃銃 この記述に関しては本書執筆時においても専門家たちの意見の分かれるところであり、結論は出でない。ただ、「アルメント地方視察報告書」の記述も含めてまとめると、「銃身装着型の銃剣を有し」、「弾薬が薬莢で一体化された」、「極めて短時間に連発可能な」銃器であつ

たとされる。

筆者は銃器の歴史に詳しくはないが、ムン王国において薬莢が登場したのは十九世紀頃。原始的な先込め式の火縄銃でさえ、当時はまだ実験的なものであつたとされる。

国際ゴブリン互助会は、この件を含めて複数の案件に関して沈黙を貫いている。といふものらしかつた。騎士様はこれを見せてもらつた後、大いにお笑いになられた。

小鬼どもはぶらんと間抜けにぶら下がつたあたしたちを見つけて、少しの間何か話し合つていた。

それから交代で喋るようにして、あたしたちにいろいろいろいろ『アルメント地方視察報告書』には、「小鬼たちは一つずつ試すように、コマ語、西ヘンデル・エルフ語、バルメン語のかザ地方訛り、古ザンカ語、ミレフ語などで『ここにちは』に当たる言葉を放」ち、顔色から通じていると見抜いて「ムン語、それも少し古い言い回し」で語りかけてきたとある（p. 223）。

ゴブリンは交渉のために最低三つ程度は外国語を覚えているとされ、今日の大天使も通訳なしで多国語を操る。声をかけてきた。

それで、急にムン語で話しかけてきたのであたしは驚き、騎士様は下ろしてくれるよう頼みこんだ。

小鬼どもは顔に似合わない丁寧な口調で、でも有無を言わさず、まずあたしたちがど

この誰で、どんな目的でやつてきたのかを訪ねてきた。

騎士様はいつものように名を名乗り、お役目を告げ、それから、鱗あるものたちに世話になつて、小鬼どもの棲む土地があると聞いたので訪ねて來たと仰つた。

小鬼は多分困惑した。

「やんごとなき方の忍ぶるは故あつてのこととお察しし、詳しきことはお尋ね申し上げぬれど、尊きお方がなんぞ小鬼めの巣穴をお覗き給うか？」

「半ばは趣味にて」

「趣味」

「また半ばは無聊の慰めに」

「は」

「一分か一厘ほどに貴族の務めにて」

ひとりの小鬼が噴き出すと、こらえきれず他の小鬼たちも笑い出し、あたしたちは下ろしてもらえた。

小鬼たちに連れられて進むと、山肌にぽつかりと洞窟が開いていた。そして中に入つて少し歩くと、重厚な銀灰色の金属の扉銀灰色の金属の扉 邊土公はこれを、「古くはまことの銀の名で呼ばれ、今日ではゴブリン銀とも呼ばれるミスリル」であると見てゐる。現在においても矮人種たちはこの不思議な金属の出所や精錬法を明らかにしていない。

が鎮座していた。小鬼が穴倉に棲むというのは本当だつたらしい。

扉は、チビの小鬼どもが引くと軋むこともなくするすると簡単に開いて、閉まる時も全く静かだつたから、ちらと振り向いていつの間にか閉じ込められたことに気づいて慌てたものだ。

扉の中は正確に四角く掘り抜かれた通路になつていて、そのところどころにぽつんぽつんと不思議な光る石がともつていた。小鬼どもがタウブタウブ 詳細不明。ミスリル同様、ゴブリンの秘匿技術の一つであろう。『アルメンツ地方視察報告書』には「夜に書をめくるに丁度良い」小さなタウブ（p. 226）を譲り受けたとあるが、現物は見つかっていない。と呼ぶ工芸品だった。はじめ、月明かりのように乏しかつたそれは、「昼歩く方々には暗かろう」という言葉のすぐ後に、まるで昼間のような明るさで通路を照らした。

通路は小鬼どもが使うにしてはすいぶんと広く、天井も高かつたけど、理由は後ですぐ分かつた。

わずかに下る傾斜のある通路をしばらく歩いて、また金属の扉を抜けた先には、町があつた。

町！

あたしがどれだけ間抜けな顔をしていたかというのは、ここには書き残さないでおく

けど、でもあたしでなくたつてどんな人でもその景色は驚いたことだろう。

今まで歩いてきた通路をもつと広く、高くしたような通路が、大通りのようにまつすぐに走つていて、規則的に決まつた感覺で作られた横道が、それを区切つていた。

地下の町の天井を支える柱であり壁である建物は、みんな外も内もあのタウブが灯されていた。窓は大きくて、薄くて、信じられないくらい透明なガラスガラス 人族社会においては、大面積の板ガラス製造は二十世紀まで待たなければならなかつた。エルフたちの選択的透過窓、ドワーフたちの美しいガラス細工窓といった一品ものは古くから見られたが、当然のように希少で高価であり、このような大量生産は他に類を見ない。でできていた。金属の枠に収まつていて、それを引き戸のようにずらして開け閉めさえできた。

建物——つていうよりは通路に沿つていくつも続いた部屋——はみんな同じような造り、同じような間取りで、それぞれの住人が、自分の好きなように合わせて飾り付けたりしているようだつた。

町のタウブはみな、月明かりのようにおだやかなもので、あたしたちを連れてきた小鬼の一人が、出入り口すぐ横の番小屋から、手で持てるくらい小さな箱型のタウブを持つてきて貸してくれた。

あたしたち異邦人は小鬼どもに囲まれて大通りを速やかに進んでいつたけれど、町中

は静かなものだつた。時折住人が顔を出して見つめてくるけど、騒ぎ立てはしない。

町の住人は、小鬼たちばかりでなく、灰鬼人の姿もあつた。人間によく似ているけど、肌は病んだような灰色で、鼻は低く、目は落ちくぼみ、頬は張りだして、唇にかかるようになすかに牙がのぞいていた。

そして意外なことに、この醜い蛮族たちは、簡素だけど清潔な服に身を包んでいた。うちの村の連中より身ぎれいかもしれない（後から知つたけど、最初の小鬼どもがまるで蛮族みたいな恰好をしていたのは、外で狩りをするときに森に紛れるための「迷彩」というものらしかつた）。

それに、地下で、こんなに人々がひしめいているのに、全然臭くない。息もつまらない。これがまた不思議だつた。

この日は、連中が「役所」と呼ぶ他より大きな建物に案内され、馬たちは廐舎に、あたしたちは部屋を貸してもらえた。部屋は二人でひとつだつたけど、それでも十分に広く、快適だつた。ふかふかのベッドが二つ。壁にはクローゼット。小さな扉付きの物入れ。そして二つある内扉のうち、一つは廁^{かわや}に、一つはなんていうのか、沐浴所？水浴びする部屋になつていた。

詳しく述べる。

今があたしは疲れてて、驚きすぎてて、無理。

二二一年 ゼン▣ゼンの月 十九日 澄曜日

二二年 ゼン▣ゼンの月 十九日 澄曜日

廁！ 風呂！ 氷室！廁！ 風呂！ 氷室！ 描写からするに水洗トイレ、温度調節可能なシャワー、冷蔵庫。ゴブリンの伝統工芸には意味不明なレベルで高度な技術がしばしばみられる。現在も彼らが人族社会との接触を制限しているのはこれが理由のひとつなのだろう。

後で時間とれるかわからんないから、朝のうちに部屋の驚きを書いとく。

廁は、つやつやした石？の椅子。穴開いた椅子。座つて用をすると、たまつた水に落ちる。恐ろしく柔らかい紙が束ねてあつて、それで拭いて、捨てていいらしい。壁の出っ張りを押すと、中の水がブツごとどこかに流れる。

風呂。天井から雨みたいにあたたかい湯が降る。温かさは、壁のつまみをひねると変わる。水は床の下に流れる。

氷室。扉付きの箱。中が冷えてる。酒を冷やしておく。

読み返すと、何とも馬鹿っぽい殴り書きだ。

でも驚きは本物なので、このままにしておこう。

灰鬼人の使用人が使い方を教えてくれなかつたら大変だつた。

騎士様は廁も、風呂も、水室も、直面するやしばらく固まつてしまつて、動かすのに苦労した。使えるものは使えばいいんだから、悩むのは暇なときにはればいいのに。

一夜明けて（お天道様が見えないから、多分だけど）あたしたちが身支度を整えると、見慣れない、でも上等なおベベを着た小鬼がやつてきて、何か予定がなければ一日ダラダラしてできれば寝てくれと言つてきた。

意味が分からぬでいたけど、小鬼はみんなもう寝ているので、それに合わせてくれると嬉しいと言つてきて、騎士様には通じたようだつた。

騎士様が言い換えてくれたところによれば、つまり、小鬼や灰鬼人は夜行性で、昼寝て夜起きる生き物なのだ。あたしたちがやつってきた頃は彼らにとつて「早朝」で、あたしたちが目覚めた今は彼らにとつて眠りにつき始める「夜」なのだ。この昼夜の違いを合わせるために、あたしたちはできるだけ眠つて、夜に備えなきやいけないということだつた。

この小鬼も「深夜」まで夜更かしして、あたしたちに合わせてくれたのだ。
ぐつすり眠れる薬もあるとのことだつたけど、さすがに怖いので、騎士様と二人でお

酒を飲んで休むことにした。食事に関しては、これから町全体が眠るので大したものはない出せないけど、と言つて、いくつか簡単な料理を包んでくれた。

四角いけど柔らかく白いパン、やつぱり四角いけど程よい塩気のハム、これまた四角く妙に綺麗に成形されたチーズ、四角く切り揃えた新鮮な生野菜、それに器に小分けにしてくれたスープ。簡単などいいながらも、村では絶対食べられなかつた上等なものだつた。

寝間着に着替え、騎士様と飲み交わし、一度寝る。

夜になり、あたしたちは身なりを整えて、小鬼たちの「朝食会」にお呼ばれした。

食堂は広くて、天井も高く、円卓に敷かれたテーブルクロスは真っ白で、もしかしたら騎士様のお屋敷のそれより立派だつた。食器もシンプルで、見慣れないデザインだけど、質がいいのはわかる。

ただ、小鬼や灰鬼人にあわせてか、タウブの明かりは薄暗く、夕食会のようだつた。

あたしは従者だし後ろに控えていようとしたら、あたしの分の席まであつて、騎士様の隣に座らせられてしまつた。いいけど、いいのかなあ。

円卓についたのは、あたしたちの他に、小鬼が三人、灰鬼人が二人で、みんなゆつたりとした上等な服を着ていた。それから、給仕としてキツチリとした服を着こんだ何人かの灰鬼人たちが出入りしていた。

騎士様が丁寧に礼容を取つて挨拶して、名と身分を名乗つて招いていたただいたことの感謝を述べると、小鬼たちは鷹揚に頷いた。それから向こうも名乗るかなと思つたら、あたしに視線が集まつて困る。騎士様が自分の従者のサイネカリアであると先に仰つてくださつて、それでようやくあたしはたどたどしく挨拶した。

小鬼と灰鬼人は順に名乗りと簡単な挨拶を述べた。きちんと覚えておこうと思つたんだけど、連中の名前はとても難しくて、あたしには聞き取れなかつたし、書けなかつた書けなかつたゴブリン団ウルク語においては舌打ちのような吸着音をはじめとして非常に多彩な子音があり、現代においてもゴブリン団ウルク文語以外での正確な表記方法はないとされている。また人名や固有名詞以外での露出がほとんどないため、詳細は今もつて不明である。『アルメント地方観察報告書』においても「発音不可能」として記述を諦めている。

その代わり、座つている順に、ミン、アツタ、ネルデー、キヤンタ、ランペーミン、アツタ、ネルデー、キヤンタ、ランペー 原エルフ語でそれぞれ数字の1から5までを意味する語。今日ではエルフ間においても使用されることは稀な言語である。と簡単な呼び名を用いてくれた。

朝食の内容は、四角い白パン、四角いハムのハムエッジ、四角いチーズ、四角く切り揃えた新鮮な生野菜、四角い芋のソテー、のつべりした色合いの茶色のブティング、こ

彼らが四角い皿に盛られている。それにカップに注いだスープ。美味しいけど、みんな四角い四角い オルフロントは『地下の帝国』において、「ゴブリンたちの国では食べ物さえもが工場で賄われていた（中略）すべてが四角い箱の中で」と述べており、恐らく十五世紀時点からすでにこの食糧生産工場が稼働していたものと思われる。のでなんだか不思議。

飲み物に、ミルクか果汁水があると言われたので、ミルクをお願いする。騎士様は果汁水。ミルクが嫌いな騎士様はこんなに大きいのに、なぜあたしは伸びないのか。ご先祖が小さいからか。

あたしがこのご馳走に夢中になつていて、騎士様はこの町に滞在する間の話をされたようだつた。行つてよい場所、だめな場所、していいこと、だめなこと、いろいろ。あとは、小鬼たちのことを色々聞いたがつてたみたいだけど、あんまり話してはくれなかつたみたい。

朝食会が終わつて、ネルデーと名乗つた、少し声の高い多分女の灰鬼人が、あたしに四角い包みをくれた。甘い焼き菓子だつた。あとで騎士様と分けた。

案内役の灰鬼人が一人ついて、町中を案内してくれた。町は決まつた歩数で道が設けられ、どこも同じ寸法でできていたので、うつかりすると道を間違えてしまいそうだつたけど、道行く連中は誰もそんな素振りはなかつた。

よく見れば新しい道に出たびに、壁の隅に金属のプレートが張られていて、そこに数字の組み合せで場所を示しているのだつた。例えば、何番通りの何番地のように。大通りをまわるすぐに進みながらあたしが頑張つて数えたところ、数え間違いでなければ、役所から町の端まで歩ごとに??本の路地があり、またその路地の端から端までは???歩ばかり??た??? 原文ママ。町を出る際に『アルメント地方視察報告書』も含めて、ゴブリンの役人によつて検閲されている。主に詳細な数字や、施設の説明などが黒塗りされており、一ページ丸々塗り潰されている箇所もあつた。『報告書』では記憶を頼りに書き直してある部分もあるが、曖昧な描写にとどまつている。

昼食は案内役が勧めてくれた店で食べる。

やつぱり四角いパン。あと四角い肉のステーキ！ どこを切つても同じように切れるのは不思議だ。何のお肉かは聞かないことにした。

昼からは??。

騎士様はどうしても興奮なさつて、あれはなに、これはなにと案内役に質問しつばなし
だつた。答えてもらえることもあるが、答えてもらえないこともある。あたしにはそもそも全部わからなかつたのでとにかく何かわかんないけどすごい、という感じ。?????では四角い飴を貰つた。ここで作つてあるお菓子の一つだそうだ。

ほとんど書いていくだけになつてあたしを氣遣つてか、案内役が何か知りたいこ

とや気になることはないかと聞いてくれた。保存食と酒を売つてゐる場所、王国通貨が使えるかどうか、あと次に行く予定の山岳地で交易に使えそうなものを尋ねると、しつかりした子ですねと褒められた。もう十五で、そろそろ十六になると伝えると、騎士様を見てしつかりしてない大人ですねと言つた。あたしもたまに思う。

求めた品は後で詰め合わせて用意してくれることになった。自分の目で見て確かめたけど、正直、この町のものの品質はあたしにはよくわかんない。

騎士様が欲しがつたものはほとんど却下された。銃とか、本とか、変わつたのでは外の土地を案内してくれる案内人とか。

夕食は役所の食堂で四角いフルコースが出た。お肉や魚、野菜が四角いのは慣れたけど、最後に出てきた果物まで四角いのは驚いた。四角い実がなるんだろうか。もしかしたら、四角い木に。

騎士様はやつぱり色々聞きたがつてたけど、役人たちは答えたり答えなかつたりで、答えない方が多かつた。あたしが小鬼や灰鬼人と聞いて想像していた荒つぽい威圧なんかは全然なく、とても丁寧で柔らかい物言いなのに、きつぱりお断りされてる。例えば、?????をする方法とか。

あたしが聞くことは大体答えてもらえた。料理に使つてる香辛料とか、調理法とか、なんで四角いのかとか。四角いのはその方が効率的で、切り分けるのにも便利だからだ

そうだ。よくわかんない。

昼夜逆転したばかりだから、思つた以上につかれて、眠い。
興奮して寝付けない騎士様に申し訳ないけど、先に失礼して寝る。

二二一年 バンセの月 十一日 縞曜日

二二年 バンセの月 十一日 縞曜日

騎士様がお持ちのとても古い地図によればザンカアラン山ザンカアラン山 現在のザンカアラン石食人種保護区域。今日では唯一の石食人種居住地である。語源は古ザンカ語で「ザンカ（＝我ら）の穴」であり、古ザンカ系民族のミスリル鉱石採掘跡とされる。という名前の山は、草木のほとんどない岩山だった。その周囲も岩がごろごろと転がり、荒れ地だ。

近づくにつれてどんどん荒れ果てていき、昼頃にはすっかり岩だけになっていた。当然道なんてなく、できるだけ起伏の少ない当たりを選んで進んでいく。

森の中を歩くのもしんどいけど、あつちは探そうと思えば食べ物も見つかたし、水場もあつた。日陰もあれば、涼しい風も吹いた。でもこの辺りは、危険な獣も出てこない代わりに、ちよいと野草を摘んでつてわけにもいかないし、水もなければ、吹く風も埃っぽい。

地下の町で貰つた保存食はまだ余裕があるけど、水は困る。あたしたちも飲むし、馬もたつぶり飲む。長居はできない。騎士様も、ここでは見るものを見たらすぐに出でいくと仰つた。

見るものなんかあるんだろうかとあたしは思つてたけど、それは向こうからやつてきた。

最初は、不安定な岩が崩れでもしたんだろうかと思つた。ものすごい物音に、おつかないなつて思つたくらいだつた。でもそれは途切れずに、ゆっくりとあたしたちに近づいてきて、ようやくそれに気づいたときには、もうすぐ目の前だつた。

岩かと思つたそれは、岩の肌をした巨人岩の肌をした巨人 石食人種。岩巨人などとも呼ばれた。本書執筆時現在、ザンカアラン保護区域に二十六人が居住している。希少鉱石などを体内で精製し、一部は体の成長に、一部は排泄する生態で、これを他種族から狙われてきた歴史があり、絶滅の危機に瀕している。だつた。その身の丈は騎士様二人分よりもまだ高く、横幅といつたら馬車か何かと比べた方がはやいだろう。周りの岩と同じ色だから、近づいてくるまで全然気づかなかつた。

巨人はあたしたちを見下ろして、それからゆつくりと腰を下ろして、まだ足りず、覗き込むようにして顔を寄せた。そのすべての動作がとてもゆつくりしていて、圧迫感はあるけど、恐ろしさはそれほどでもなかつた。いや、怖いは怖いんだけど。

巨人は酷く大きな口をバキバキと開いて、岩山を通り抜ける風のような、不思議な声で語りかけた。

「柔らかい人が来るのは珍しい。ここにはお前達が食べるものは何もない」

巨人は古ザンカ語でそう言つた。騎士様はこの巨人にいつもの名乗りをして、話をしたいと仰つた。あたしは古ザンカ語なんて聞き取るだけで精一杯なので、正しく意味をくみ取れたかはわからないけど、話の内容はこんな感じだつた。

つまり、ザンカアラン山には貴重な鉱石があるかもしないので、よければ人を呼んで調べたい。そして見つかつたなら、掘り出していきたい、とこういうことだつた。巨人は、柔らかい人は昔の昔も穴を掘つていつた、いまはいなくなつた、柔らかい人が食べる（？）石はもうないと思う、と言つた。

騎士様が、昔の昔の柔らかい人たちがどんな石を掘つていたのかを尋ねると、巨人は白くて硬い石だといつた。美味しい？が珍しくて、とても深いところにしかない、柔らかい人たちが掘りだしては、たまに食べさせて（？）くれたが、いまはない、と。

騎士様は多分その鉱石が欲しかつたんだと思う。調べるだけ調べていいかと聞いていたけど、巨人はあまり気乗りしないようだつた。それというのも、昔の昔、白くて硬い石を分けてくれるというから柔らかい人たちを手伝つたが、出てこなくなると柔らかい人たちは掘り出した石を全部持つて行つてしまつたのだという。それに巨人の若者

も何人か連れて行つてしまつたと。

騎士様は粘り強くお願ひしたけど、巨人は頷かなかつた。

あたしは話を聞きながら、小鬼たちに貰つた石を思い出した。山岳地で交易に使えそうなものをお願いしたら、なんか石を詰め込んだ袋を寄越されたのだつた。見た目より軽いけど、やつぱり石だから重いし、かさばるので困つていたのだけど、この巨人との取引に使えつてことかもしれない。

あたしが一つ手に取つて巨人に見せてみると、巨人は鼻を寄せて匂いを嗅いだ。

「ああ、これだあ、白くて硬い石だ。いい匂いだあ。良ければ少し分けてくれないかな」「どうぞ。あんまりないので、ちょっとだけ」

あたしが石を何個か、巨人の大きな掌に載せると、巨人は喜んでそれを持ち上げて、もののすごい音を立てて指先で粉々に碎いてしまい、近くの岩に振りかけた。そしてその岩を持ち上げるや、おもむろにかじりついたのだつた。

びっくりしてゐる間にも、巨人は岩をバリバリバキバキと噛み碎いて、すっかり食べてしまつた。

あたしの翻訳が間違つてゐるのかと思つたけど、本当にこの巨人は石を食べるのだつた。

「かりかりして、なんて芳醇な香りだらう。ほんの少しだけでも、こんなにうまいだなん

て、ああ、幸せだあ

巨人はうつとりとした様子で、ぼろぼろと食べかすを、つまり岩の欠片を落とした。怖つ。

気分がよくなつたところで交渉を進めてもらおうと思つて騎士様を見たら、ものすごい目で見られた。

それから、石を一つ手に取つて、ものすごい顔をした。

何か不味いことしたかなつて思つたら、これ、ミスリル鉱石だよつて言われた。ミスリルつておいしいんだ。試してみようと思つたけど、歯が欠けるよつて言われたので諦める。

袋一杯に詰まつてると知つて、騎士様はものすごく悩んだみたいだつたけど、これを巨人に渡して、お願ひすることにしたみたいだつた。

巨人は単純なようで、この贈り物に大いに喜んで、王国の調査隊がやつてくること、山を掘ることを許してくれた。そして今度はきちんと約束が守られるように言い、もし破られた時は山を閉ざすと告げた。騎士様は後できちんとした契約書契約書 史書に言うところの『ザンカアラン採掘条約』。邊土公は帰国後、専門家たちとの相談の上で条件を詰め、石食人の代表五名と再度面会し、この条約を正式に締結した。を作ると約束した。

目的が済んだので、あたしたちはあわただしくはあるけど、すぐに次の土地へ向かつた。何しろこの土地はあたしたち「柔らかい人」には、食べるにも寝るにも困る場所なのだ。

水がなくなる前に、あたしたちは「柔らかい土地」に向かわなければならなかつた。ところで、舐めてみたけどおいしいものではなかつた。残念。

二二一年 ゴランの月 二十九日 澄曜日

二二年 ゴランの月 二十九日 澄曜日

テーブル台地 ウルーマン高原のこと。現在のアラミラ地区のほぼ中央に位置する高原で、一部には雲がかかる。下界と隔絶された環境で固有の生物相となつてゐる。人力による登攀は二〇〇六年によく達成された。に上る方法がわかつた。

と言うより向こうから来てくれた。あたしたちがここ三日ばかり、頭を悩ませながら絶壁を見上げている間に、あたしたちの炊事の煙が上から見えて、気になつて降りてきらしい。

あたしたちの野営地に連中が舞い降りてきた時、あたしたちはちよど朝ご飯のステープをすすつてる時で、慌てて立ち上がつた時にはこずえの上から囮まれて見下ろされていた。

遠いハルモールでも、翼持つ怪物たちの話は伝わつていた。人間をさらつて食べてしもうとか、それどころか牛のような大きな家畜も簡単にわしづかみにして連れ去るとか。

そう、妖鳥人妖鳥人 有翼人。十五世紀当時は魔物として扱われていた。現在でも居住区域が限られているので誤解が多いが、ほとんどは他人種の無知からくる捏造である。どもだ。

でも、話に聞いていたのとは姿が違つた。

あたしが知つてるのは、人間の上半身と鳥の下半身を持つていて、両腕が巨大な翼になつてゐる怪物の話だ。でも実際に目にした妖鳥人はほとんど人間と変わらなかつた。両手は人間と同じで、指の数も五本。服だつて着てる。足は馬のような巨大な猛禽のそ
れで、翼は腰から生えていた。枝に腰掛けて、やけに大きな目で見降ろしてくる。

騎士様は、さすがに警戒はしていたけど、いつものように名乗つて、挨拶した。あたしもそれに続く。妖鳥人どもが首を傾げながら甲高い声でやり取りするのを聞いて、騎士様は古ザンカ語に切り替えた。やつぱり、ここら辺は古ザンカ語がよくつかわれてるみたいだつた。

「羽なしはいつの間に帰つてきたのか。どうして日の上る方でなく日の沈む方から來たのか。風の子たちは孵つた卵の数を覚えていない」

これは多分、何世代も前の大昔にこのあたりに古ザンカ人がやつてきて、交流してい
たつてことなんだろう。それで、東に去つていつたつてことだ。

騎士様は自分たちがザンカ人ではなく、新しく西からやつてきたと伝えた。できれば

仲良くしたいのであいさつ回りをしているとも。妖鳥人がぴーちくぱーちくやかましく相談するので、騎士様はあたしに目配りした。土産の出番だ。

それは先月、ク▣ク塩原でたっぷり仕入れてきた岩塩のこと。これをひとかけ見せただけで、妖鳥人どもは一層騒ぎ立てた。結局騒ぐのか。

「からかい赤い石赤い石 ク▣ク塩原の岩塩でも特に有名なローズソルトのこと。鉄分豊富なため赤っぽい色合いをしている。塩商人たちもさすがに高原は周回ルートに入つておらず、ウルーマン高原では塩の入手方法がほとんどないため、非常に希少だつた。！」

やるというと大喜びで、連中はあたしたちを高原に案内してくれるといつた。

一羽一羽 もちろん、今日このような数え方をした場合、裁判では負けるので気をつけよう。が急いで飛び立つた。あたしたちも片づけをして身支度を整えると、帰ってきた妖鳥人は何倍にも増えていた。そして大きな絨毯のような布を担いできた。これを広げて、あたしたちに一人ずつ乗るように言い、馬もそのようにした。そしてその布一枚につき四羽ばかりが力を合わせて引っ張り上げ、あたしたちは恐ろしい空に旅に出たのだった。

あたしの知る限り、王都の貴族様だつて、空の旅なんてしたことがないだろうけど、でもこれはあんまり快適なもんじやなかつた。そりや、空から見下ろす景色はすさまじい

ものだつたけれど、船よりも激しく揺れるし、吹きすさぶ風に髪が根こそぎにされそうになる。感動半分、早く終わつてくれ半分だ。

辿り着いた高原は、意外にも普通だつた。

妖鳥人どもが下ろしてくれたのは、普通の野原のようにも思えた。でも、見渡しても木々はほとんどなく、あつても背の低いもので、草は見たこともない葉を生い茂らせるし、知らない動物や鳥たちもいる。もつとも、そう言うのを落ち着いて観察するまで、しばらくかかつた。

つていうのも、凄まじい揺れに酔つたのか、あたしはものすごい気持ち悪さに襲われ、身動きが取れなかつたからだ。騎士様もそうで、青白い顔でぐつたりしていたぐつたりしていた。急激な気圧差にさらされた結果、軽度の高山病の症状を示したと思われる。ぴーちくぱーちくうるさい妖鳥人どもに付きまとわれ、しばらくの間、ゆっくりとだけど動き回るうちに、なんとか落ち着いてきた。

妖鳥人どもの集落は巨大な鳥の巣だつた、となれば面白かつたんだけど、意外にも石を積み上げて作つた、石造りの家だつた。木々が少ないので、木造建築は難しいらしい。

連中の村は野原にそんな石造りの家が何軒かあり、数家族程度がまとまつているようだつた。

お喋りな妖鳥人どもが聞いてもいないのに教えてくれたところによれば、彼らはみんな

な芋や豆、小麦を育て、羊のような家畜羊のような家畜 ウルーマンオオケナガトカゲ。有毛爬虫類の中では、世界で最も標高の高い土地に棲息。下界に棲息する近隣種のオオケナガトカゲ類と比べて大型で、体毛が豊富。尾や足は短い。を放牧し、それから毛皮と肉と乳を得ているのだという。狩りもするけど、大型の獣は高山の上にはあまりおらず、下まで降りて捕まると持つて帰るのが大変なので、あまりしないとか。

そう言うぴーちくぱーちくを聞いてる間に、気分も少し良くなってきた。それでもなんだか息苦しい。騎士様が言うには、空気が薄いんだそうだ。高い山の上と同じように。

日差しは強く感じるけど、空気は肌寒い。あたしたちは荷物からマントを出して着込んだ。

村の鳥どもに岩塩を渡すと、大いに喜ばれ、羊を一頭さばいて歓迎の料理を作つてくれた。

つていつても、煮込み料理煮込み料理 ウルーマン高原のような高山地帯では、気圧が低いために水が低温で沸騰してしまい、十分な加熱が難しい。近年圧力鍋が登場するまでは、目張りした土鍋などを用いて長時間煮込むことで解決していた。にすごく時間がかかるて、歓迎の宴は夕方になつちやつたけど。

羊の煮込みは骨付き肉がごろごろ入つており、干し芋や豆でかさ増しをしていた。色

は驚くほど赤く、これは酸味のある赤い果物赤い果物 今日のトマト、その原種はアラミラ地区が原産。ウルーマン高原には有翼人が持ち込んで栽培を始めたとされ、野生のものはない。と一緒に煮たからだそうだ。干し芋などと一緒に、この果実を干したものも分けてくれた。

麦の栽培はしていないみたいで、もつと粒の細かい雑穀の類雑穀の類 同じくアラミラ地区原産のキヌアに連なる疑似穀物だろう。健康食ブームなどで諸外国でもてはやされたが、現地ではむしろ小麦などが輸入されるようになり、キヌアの消費は減っている。

が食べられていた。妖鳥人が「食べる実」、「器に盛るもの」などと呼ぶもので、つまり彼らの主食だった。毒なのか苦味があり、水にさらしてやらなければならぬいらしげど、たくさんとれるそうだ。

茹でて他の料理にまぶして食べたり、煮込みに入れたりしていて、プチプチとした食感が面白い。ちょっと癖があるけどほとんど気にならず、あまり味もしない代わりに、他の料理の邪魔をせず、かさましに役立つ。

連中はこの穀物で作った酒も飲んでいたけど、あたしは遠慮しておいた。試しに飲んでみた騎士様が何とも言えない顔をしたからだ。飲んでもいらないのに不味いとは言いくちらないけど、多分馴染みのないあたしたちには難しい味だろう。

なおこの酒は、茹でた穀物を口で噛んで唾液を絡めて壺にためて発酵させるらしい。あたしには無理だ。

たくさん食べて気持ちよくなり、村長らしい年老いた鳥の家に休ませてもらう。
塩のお礼だと言つて、村長は金とダイヤモンドをくれた。

いま、こうして書いていても信じられなくて何度も見て触つて確かめてるけど、本物、
だと思う。騎士様も本物だつていう。このテーブルみたいな台地には、自然に転がつて
いるらしい。それも、無造作にごろつと置いておくくらいには。

連中のつかう道具の中には、金を普通に使つてるものもあるし（金の鍬なんてはじめ
て見た）、重たいとか文句も言う。ダイヤモンドも、きれいだけど硬いから加工しづらい
とか言つて、子供がおはじき遊びに使つてる。

これひとつであたしの実家くらいいくつか買えそうだ。むしろ村^ゴとかな。これは
もうけ話になるかもつて興奮してたら、騎士様に笑われた。

ああ、うん。言われてわかつた。

持ち帰るには、鳥どもに運んでもらわなきやいけないんだつた。

二十三年 サンザールの月 二十一日 縞曜日

二十三年 サンザールの月 二十一日 縞曜日

ビヤン・ミエンの滝を見上げながら年越しをした時も、ずいぶん遠くに来たもんだなあつて思つたけど、旅立つてからもう一年も経つてしまつた今日を迎えて、さすがに遠すぎるなつて思う。

最初は荷物を背負つて転ばないようにするだけで精いつぱいだつたのに、いまじやバランスを取りながら岩山をよじ登ることだつてできる。背は相変わらずちびつちやいままだけど、腕の筋肉がみつちりしちやつてちよつと乙女の的ピンチだ。

馬も売つたり食べたり死なせてしまつたりで三度にわたつて乗り換えたし、あたしたち自身も命の危機に何度もさらされてきた。旅立ちの日に鞆の中にあつたものは、旅の中で消費したり交換したりで、ほとんど元のものは残つていない。
魔獸に襲われたり、盜賊に襲われたり、刺客刺客 邊土公を狙う刺客が、『邊土紀行』内だけでも数度にわたつて襲撃してきていた。

に襲われたりしたことも一度や二度じゃない。

旅の連れも、増えたり減ったりで、はぐれて一人旅になつてしまつたこともあつたし、逆にキャラバンにお邪魔して大所帯になつたこともあつた。言葉も通じない蛮族と身振りなんかで意思疎通することもあつた。王国語と、ことわざくらいの古ザンカ語しか使えなかつたあたしも、今や立派なマルチリンガルだ。王国内でそれを使う機会はないけど。

名もない砂丘を乗り越えて、あたしたちはメレベレク川メレベレク川 現在はセンマツツ連邦（十五世紀当時はセンマツツ共和国）とムン王国の国境として扱われているが、当時は魔獣の跋扈する未開の地と人界を隔てる境界だつた。というよりはその源流にたどり着いていた。流れは穏やかだけどとにかく幅のある川の向こう側には、うつすらと民家や、炊事の煙が見える。

騎士様はあれはセンマツツだと仰つた。ここしばらくは騎士様でさえ全く知らないわからないということが多いので、はつきり仰るというのは随分久しぶりだつた。地理のことも外国のこと全然知らないあたしにははあそうですかとしか言えないんだけど、すごいことらしい。

見渡しても橋はなく、渡し船の類もなかつた。でもそこまで深くはなかつたので、馬に泳がせるかとなつた。旅立つたころのあたしたちなら遠回りでも橋を探しただろう

けど、なんだか団太くいい加減になつてきた気がする。

幸い、ゴレンで譲り受けた馬ゴレンで譲り受けた馬。ゴレン湖の鱗人種、ミニニ氏族たちから譲り受けた爬行種の馬。訳者は取材と称して乗つてみたことがあるが、品種改良された現代の種でも、左右の揺れが大きく、尻のすわりも悪い。水上を泳いでいる時の方が安定しているまである。たちは、むしろ久しぶりの川に喜んで泳いでくれた。こしづらくなつたからなあ。丁度暑い時期だし、涼しくていい。

でも楽しい水上の旅は長くは続かず、向こう岸に近づいたところで、近寄ってきた船に矢を射かけられてしまつた。滅茶苦茶に荒っぽく何か叫んではわかるけど、センマツツ語というやつなのか、全然聞き取れない。

すっかり慣れちゃつて悲しいけど、あたしはそもそも盾を掲げてその陰に隠れた。
あたしは護衛じやなくて従者なので、荒事は無理なのだから。

荒事担当こと騎士様は矢を切り払つて、大声のセンマツツ語で短い単語を何度も叫んだ。多分やめろとかそういうの。あとで聞いてみたら、あたしたちを蛮族（※4）だと思つて攻撃してきたみたいだつた。騎士様が言葉の通じる相手だとわかつて一旦は矢も止まつたけど、弓は構えたままで、あたしたちが岸に着くまで船はつかず離れずだつた。

あたしたちが上陸すると、野次馬がどよめいた。まあ、あたしもこの鱗ある馬は邊土

でしか見たことないしなあ。仕方ないと思う。ドラゴンドラゴン 知的人種であるドラゴンと爬虫類を比較することは、学術的にはともかく一般的には当然差別に当たるが、十五世紀当時の認識で言えばむしろドラゴンの強大さに対する恐れからの言及だらう。を見たことない人からすれば、小さなドラゴンかと思うくらい顔が怖いし。慣れると可愛いんだけどなあ。リンゴ好きだし。

大分久しぶりに、いわゆる「人」里についたけど、長居はできなかつた。騎士様は身分を示して、なんだか偉そうな人と話に行つてしまつて、あたしは留守番していた。そして騎士様が帰つてきたら、すぐにとんぼ返りする羽目になつた。

こちら辺はセンマツツで言うところの邊土、ド田舎の端で、蛮族がやつてこないよう見張つてるんだそうだ。このあたりの領主様は面倒ことは嫌なんだそうで、中央に報告したくないからさつさと出て行つてくれつて。いい加減だ。

騎士様はその領主様にダイヤをいくつか渡して、王国宛ての手紙を出してもらつたみたいだつた。そのせいがあたしたちがお宝を持つて漏れたみたいで、よからぬ連中が非力なあたしを狙つてきたけど、もうちょっと頭使つた方がいいと思う。

今日は馬たちの餌は要らないな。

その騒ぎもあつて、一泊するどころかご飯も食べられないままあたしたちは川を逃げ帰つた。

センマツツ料理食べて見たかつたんだけど、残念ながら今日のご飯は昨日と同じく砂
蟲砂蟲 レッドデスマームのこと。のシチューだ。

二十四年 レムの月 十七日 澱曜日

二十四年 レムの月 十七日 澱曜日

昼過ぎになつて、サンクランのお屋敷にたどり着いた。

昨夜日記に書き込みすぎたせいか、なんだかかえつて感動が少ない。

ようやく帰つてこれたと小躍りするだろう、なんて昨日は書いたけど、とにかくいまは日記も後にして横になつて休みたいくらい。

というのも、朝から騎士様を狙う連中に襲われたのだつた。

邊土深くに入つてしまつてからはご無沙汰だつたのですつかり忘れていたけど、そう言えばそう言う連中がいるのだつた。貴族つて言うのは面倒なものだ。詳しくは知らないけど、兄弟から狙われているというんだから、おかわいそうに。

まあ、刺客の連中をとても楽しそうにぶちのめして伊達者伊達者 十五世紀当時の騎士の礼儀作法集の一節には、襲われた際には言葉で諭して場をおさめるのが最良であるとされ、次に良いのが殺さないように傷をつけて痛めつけ、追い返して見せしめにする

ことで他の者を牽制することとされた。殺すのは悪手であるとされる。これは当時、貴族及び騎士身分の間での私闘による死者が非常に多かつたことから、それを諫めるためであつたとされる。にして返すような人だから、狙われても仕方ないんじやないかつて氣もする。

いまは、他の馬が怯えるのでお屋敷の池に鰐馬を泳がせてやり、旅の荷物を庭に広げているところだつた。何しろあたしたちは長旅ですっかり汚れていたし、何度か替えたとはいえ鞄もぼろぼろに汚れてる。お屋敷にそのまま入れるわけにはいかないから、庭で綺麗にしてやるのだ。

騎士様は品の一つ一つを検分して使用人に扱い方を指図して回つていて、疲れ果てたあたしは休んでいるように言われたので、まだ目が開いてるうちにこれを書いてる。

それにしても騎士様は元気なこ元気なこ 原文ママ。力尽きたらしくここで途切れている。書き直しもしていない。

目が覚めたら使用人の人たちに全身をわっしやわっしや洗われていて、慌てて溺れるかと思つた。

汚れをすっかり洗い流した後は、伸びすぎていた髪や爪も整えてもらい、油や軟膏で全身を磨かれ、おろしたての上等な服までもらつてしまつた。さすがに怖気づいたけど、着ていた服は、洗濯したらぼろぼろになつてしまつたらしいので、仕方がない。よ

く今まで持つてくれたものだ。

でもフリルでふわふわってのは落ち着かない。騎士様はこういうの好きそうだけど。食堂では、メジロワシのローストや、新鮮な生野菜、混ぜ物のない白くて柔らかいパンといった上等な品が出てきた。もしかしたらと思つて日記を見返したら、旅立つた時と同じメニューでちょっと懐かしい。久しぶりに人間の世界の食べ物を食べた気がする。

でも、邊土の食事の方がおいしかつたものもあつて、この感覚の変化はまずいなあつて思う。芋虫とか蛇とか、こつちで食べたらドン引きされるだろうし。

お腹が満たされて、あたしは騎士様と一緒にベッドに入った。旅の間ずっと二人で寝ていたから、離れると寝つきが悪いのだ。

騎士様はあたしの左耳左耳 ク▣ク塩原における塩抗争に巻き込まれた際、塩賊に左耳を切り取られてしまつていて。や、身体中の傷を一つ一つ優しく撫でながらねぎらつてくれた。

騎士様は何度も謝つてくれるし、あたしもまさかここまでぼろぼろになるとは思わなかつたけど、でも、あたしは生きてる。生きて帰つてこれた。耳はまだ片方残つてるし、目は何と両方元気だ。指は二本欠けちゃつた欠けちゃつた 左手の中指と右手の人差し指。それぞれヘンミ密林のワシバチの襲撃、ザン平野のドラゴン、カワヴァン・ガバ

ンとの契約の際に失われた。けど、ペンも握れる。騎士様だつてたくさん怪我したし、その中にはあたしをかばつてくれたものだつてあるのだ。

それになにより、あたしには大きな希望があるのだ。

騎士様がそれは何かとお尋ねになるので、忘れていたら困ると思つて、私は毎日計算していた表をきちんと見せた。

二年と三か月と十三日分のお賃金は、金貨で換算しても相当なことになつていたのだつた。

これで立派なお家も建てられると胸を張るあたしは、まあ本当のお金持ちである騎士様からしたら微笑ましかつたのであろう、子供にするみたいに頭をなでられてしまつた。

そして、お家どころか、頑張つた君にはお城お城 この後に建造されるアルメント城の定礎には本当に「小さな従者に捧げる」の文言が刻まれており、邊土公とサイネカリアの間の深い親交と信頼がうかがえる。
を建てちやおうなどとおつしやつた。

本当にお城がもらえたなら、掃除するのが大変そうで、ちょっと困るかも。

あたしと騎士様の旅はこれで終わつた。

騎士様はまだ引き続き従者として雇つてくれるそうだけど、あたしに内地での大人し

い生活が今更出来るんだろうか。

一生分旅したような気もするのに、こうして日記を書きながら、心中ではもう明日はどこに旅立つのかという気持ちになつていて。でも、とりあえずは、これで一度終わりだ。

アミエリタの娘、カリアラガンの子、ゼ▣クー・エルマの従者サイネカリアが記した。